
Episode Myself side story ～**巖戸台分寮最強決定戦**～

そうじ たかひろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Episode Myself side story ～巖戸
台分寮最強決定戦～

【Nコード】

N2945L

【作者名】

そつじ たかひろ

【あらすじ】

いつも読んでくださっている皆様に感謝の意を込めて。

番外編『巖戸台分寮最強決定戦』Episode Myself
versionをお送り致します。楽しんでいただけたら幸いです。

ぬじまきさんとの合作ですー

2009年PPP発売記念 and 2010年新春スペシャル企
画。

小説家になろうにてペルソナ3二次創作小説『死神の破片』を書かれている、ぬじまきさんと私 そうじ たかひろとの合同作品です。

主にぬじまきさんの所には湊視点を、私の所には別の登場人物の視点で同一内容を掲載しています。

Episode Myself versionをお読みになられた方は是非 死神の破片versionもご一読くださいませ。

○死神の破片 side story 巖戸台分寮最強決定戦――

作者：ぬじまき氏

<http://ncode.syosetu.com/n3110j/>

あらすじです――

とある休日の前日。

湊はベルベツトルームへ依頼の完了を報告に行った帰りがけにエリザベスより銀色のランクケースを渡される。

中身はエリザベスが『遊戯王』を模して作ったカードゲームだった。

『オレのターン、ドロ―っ！』

特別課外活動部最強は誰なのか――

自ら構築したデッキと己の戦略を武器に……今、激闘の幕が上がる。

●注意です――

この番外編はペルソナ3本編、及びEpisode Myself本編とは関係ありません。

巻章〱わたくしのターン、ドロー〱エリザベス

「湊様。本日は貴方にお渡ししたい物がございます」

「渡したい物？」

依頼の品の確認と、新たな依頼を一件受けた湊様は、もうここに用は無いとばかりに、一切の未練のひとつかけらもなく出て行かれようと思えます。

わが主とは、時に何時間もベルソナとの合体（主に×ボタンの連打）について話をしているというのに。

思えば最初は単純に外の世界を見てみたいという純粹な知的欲求でございました。

しかし気が付けば、わたくし興味は外の世界から、外の世界にいる彼の人へと移ろい、依頼に私個人の願いを分らないように紛れ込ませるようになり、ついには湊様の部屋へ赴く事も叶いました。

わたくしなりに精一杯がんばりました。

ああ、思い出します。湊様との、誰にも邪魔をされない二人だけのひと時を。

わたくしは湊様より色々と教わりました。

そう、あの日は湊様のお部屋ではなんと！……こほん。

しかしそれ以降何もございません。

まったくございません。

電話もタルタロスのエリア開放のみでございます。

当然湊様よりかかってまいりません。

待っている女でございました。

ですが、今日のわたくし、エリザベスは少し違います。

なんとわたくしから声を掛けます。

その為の事前調査も完了、準備万端、細工は流々仕上げを御覧じろ……でございます。

「最近、耳にしたのですが、なんでもカードを使った戦い、デュエルなるものが流行つてるとか」

「え……ああ」

「実はわたくし、カードを使った戦いには少々心得がございます」

ああ、目を瞑ると今でも鮮明に思い出します、あの熱い熱い戦いを。湊様はお一人でわたくしに逢いに来てくださり、わたくしを完膚無きまで叩きのめし、力なく座り込んだわたくしを上から見下ろす湊様の凛々しい眼差し。

最も、せっかくご招待いたしました深層モナド最深部に、こともあらうに最初はヒールとミニスカとロボ……もとい三人の女性方（型）とご一緒に来られたのです。台無しです。事もあるうになんでしょう、そのハーレムなパーティは。

本当に心苦しかったです、即、湊様を我が主の元へとご案内させていただきます。

瞬 殺 でございます。

後にはまるでわたくしの心を表すのような、悲しげな音楽と共に、我が主のどうでもいい、皆様もボタン連打をされておいでだろう言葉が流れておりました。

いや、そんな回想をしている場合ではございません。

湊様もなにやら顔をしかめ、なぜか冷や汗をおかきの様子。さつさと話を続けましょう。

「カードの戦いと聞きましたので、気になり少し調べてみたのですが、それは思いもよらない過酷な物語でした。敢えて一枚のカードに自らの運命を託し、未来を切り開く。その歴史は遥か古代エジプトにまで及ぶとか。わたくし、深く感銘を受けました」

そう、「友情」「死」「愛」の物語。それは古代エジプトの王の真の名を巡る壮大なそれは壮大なストーリー。とても素敵な話でした。是非ともわたくしの衣装にも通じる色、青い目をした龍を操ってみたく存じます。

はっ！ わたくしとした事が。いけません。危うく空想の世界へと旅立ちかけておりました。今度こそ話を進めましょう。

「わたくしもカード使いのはしくれ。この影時間の世界を舞台に、カードゲームなるものを作れないかと……」

いそいそと取り出したるは銀色の鞆。この日の為に用意したわたくしの自信作。ついにお披露目の時が参りました。

「どうぞご覧になってくださいませ」

さあ、どうでしょうか？

いかがでしょうか？

湊様の表情がとても気になります。

ケースには皆様、特別課外活動部のメンバー全員の名前が書かれた札。

さらにその下には沢山の絵柄が書かれたカード。
このカードこそ考えに考え、考え抜いた一品。

皆様お一人お一人の性格を深慮し、その奥にある性格にまで踏み込み作り上げた自信作。

当然事前調査の甲斐あって、七夕やら屋久島やら H e a r t f u
l C r y やら万事折込済みでございます。

そして今回の目玉、異空間形成装置。

これがあることにより、机の上で行うカードゲームから格段の進化を遂げた真のデュエルが実現するのです。ここまで再現するとはまさに社長もびっくりでございます。

「これは……？」

「皆さまそれぞれの戦いぶりに相応しいカードを作らせていただきました。こちらの中から共に戦うカードたち、デッキをお作りください。そしてその横の装置は、異空間形成装置でございます」

「異空間形成装置？」

「私が参考に拝読致しました書物には、デュエルディスク『決闘盤』という名がつけられていました」

『わたくしのターン、ドロー』

こうやって右手を上げポーズを取るだけであの興奮が蘇ります。

“粉碎！！玉砕！！大喝采ー！！” …… ああ、わたくしも言ってみたく存じます。わが主相手に一度デュエルを仕掛けてみましょうか。

こほん。

「詳しい方もいらっしやるかとは思いますが、念の為ルールについては説明書を同封しておりますのでご一読くださいませ」

なにやら考えていらっしやるご様子の湊様。でも大丈夫でございます。

いつも帽子をかぶってらっしやるヒゲの方。
ダークサイドへと落ちそうな槍使いの少年。

そしてあの時モナドでも湊様のバックアップをしていた女性も知っていることでしょう。

「いつもわたくしの依頼を受けていただいているお礼とでもお考えください。それではどうぞご堪能くださいませ」

「ありがとうございます」

銀の鞆を手にし、ベルベツトルムを出てゆかれる湊様。

もし楽しんで頂けたのなら、この不肖エリザベス、感激の極みでございます。

本当は深々と礼などせず、湊様のお背中を貫くほどに見つめておきたく存じますが、さすがにそうも参りません。もちろんわたくしの視線に貫通属性などございません。

お名残惜しくも気配を感じ取れなくなるまで、深々とお辞儀をし、お見送りいたします。

さてと。

「主様」

「なんですか、エリザベス？」

「わたくし一つお願いがございます……」

「また……ですか」

今日も主様は、いつも通り、困った顔をしていらっしやいました。

巻章〱わたくしのターン、ドロー〱エリザベス（後書き）

この番外編は別の視点でも書かれています。

○死神の破片version - 作：ぬじまき氏

<http://ncode.syosetu.com/n3110j/1/>

武章「オレのテンションは一気に過熱したっ——」伊織 順平

特に今日もする事がなく、ラウンジで今度作る映画の台本を読み直してた。

他のみんなは部屋にいるか、外に出かけているようで珍しくラウンジにはオレ一人。

相変わらず、なんかこうモヤモヤする。

あの日、自分には影時間で戦う事しか無い事に気が付いてしまったあの日。

モヤモヤの原因は分かったが、未だその原因が解消した訳ではなく、勉強も出来ない、運動も特に秀でている訳ではない、何か目標があるわけでもないといった状態が続いていた。

そしてそれらを吹き飛ばすように、最近はおっぱらチドリの事が気になる。

オレに、オレなんかになにが出来るんだろうか。

—— せめて今作っているこれで、少しでも何かを感じてもらえたらな。

左手に持つ映画の台本を見ながら、心の中で呟く。

一人でいる事が物思いを加速させる。

明るい材料がないからその思いは暗く傾く。

具体的に言葉に、形に表せない不安が心を圧迫する。

将来に対する不安。

漠然とした不安。

世の学生に聞きたい。^{みんな}どうやったら明るく、前向きに不安なく生きて行けるのだろうか、と。

「ただいま」

不意に無人で、無音だったラウンジに扉が軋む音が響く。

月光館学園二年生一位の成績で、

学園内の複数の女子から本気の思いを寄せられていて、

運動をすれば、全国区の選手とタメを張り、

常に冷静沈着、勇気漢級の我らがリーダー。

なーんも考えてないような、悩まないような顔してっけど、あいつも色々悩んでんだろうな。

「お、おかえり〜」

「あつ、順平。あのさ……」

どこから帰ってきた湊がいきなりオレに見せたのは銀色のトランクケース。

ラウンジにテーブルに置いて、湊はおおまかな説明をオレは始める。

「……と、いうわけなんだけど」

ま、大体事情はわかったけどさ、その前に一つ。

「なあ、いつも思っただけどさ、エリザベスって誰？」

「銀髪美女」

「いや、そうじゃなくて……」

はあ……まあいいや。こいつ、スゲエくせによく意味がわからん。意味がわからんからスゲエのか？

だけど湊あけたトランクケース中身を見た瞬間、オレのテンションは一気に過熱したあつ！

「うお、すげえ。これはシャドウ、それにペルソナ。スキルもあるし……ってかこれ決闘盤？　うわヤッバー、テンション上がってきた」

カードを手にとり、一つ一つ確認するが……

本物そっくりだ。作りがヤベエ。

つか、エリザベスってのは一体何モンだ？

「順平、決闘盤って何？」

「ああ、『遊戯王』つつう漫画があつてさ。その漫画ではここにカード指すと立体映像が出るんだけど……。」

なにかを納得したかの表情の湊。

オマエあんま漫画読まないもんな。もちつと読んだ方がいいぜ。ありゃあ男子のたしなみだ。将来後悔すんぞ！？　知らなきゃ伝わらない会話術ってのが世の中あるんだよ。

『いくぜ湊。地返し玉の貯蔵は十分か』とか、

『ああ。時間を稼ぐのはいいが……湊よ、別にアレを倒してしまっても構わんのだろう？』みたいな？　タルタルでも使えそうなセリフ一杯だぜ？

「何やってんの?」「何をしてるんだ、お前たち?」

トランクの中にある物を一通り出して確認している所に、同時に二方向から声をかけられた。

顔を上げて声がした方を見ると、玄関にはゆかりツチ、風花、アイちゃん。

階段からは真田先輩、荒垣先輩、桐条先輩、そして天田少年の姿。いいタイミングじゃん。

「お? ちょうどいいところに。実はさ……」

一通り説明を終え、各人様々な反応。どうせなら女子も含めて全員でやりたいところなんだけど……

「ふむ。影時間を舞台にした戦略性が求められるカードゲーム……か。面白そうだな」

「勝負と聞けば引き下がれないな。やってやるうじゃないか」

正直、桐条先輩や真田先輩がここまで理解して、食いつくつてのは予想外だった。

「へえ? 男子がやってるのは見たことあるけど……面白そうじゃない」

「私は少しやったことがありますよ」

おほお、ゆかりツチも風花も乗り気じゃん。

「ぼ、僕は皆さんがやるというのなら、参加しますけど」

天田君よ、もちつと子供っぽく喜びを表そうぜ。

「……俺はいい。んな遊びに付き合ってられっか」

ありやま。

ま、確かに荒垣先輩が『だれがターンエンドを宣言をした？』

なんて言っても……似合ってたな。他の誰よりも合ってるな。つかカッコイイじゃねえか。なーんかもったいたいねえが……しょうがないか。

カードをトランクケースから取り出しながらもテンションは上がりっぱなし。

今からどんなデッキを組むか、どんな戦略を構築するか……

万能型か、特化型か、それとも……久しぶりにマジ楽しくなってきた。

「八人なら、いつそのことトーナメントにしましょうか。くじ引きでもして組み合わせを決めて。今日は各自デッキ作って明日勝負ってことで」

湊のナイスな提案に、皆が頷く。オレっちとしても臨むところだ。

—— そうだよな。これでいいんだ。

バカやって。バカ言って。みんなで笑って。

世界の危機も大事だけど、学生らしく楽しむのも大事なんだ。

ここにいる連中はただでさえ楽しむのが下手で。

オレと違ってヘンに大人だからバカみたいに抱え込んで。

オレの役目はこれなんだ。バカ言ってるやいいんだ。

それでみんなの負担が少しでも軽くなるなら、それでいいんだよな。

そうと決まりやあ、まずはこの勝負。ガンガン盛り上げていくかつ

！

式章 } オレのテンションは一気に過熱したっ！ } 伊織 順平（後書き）

この番外編は別の視点でも書かれています。

○ 死神の破片 version - 作：ぬじまき氏

<http://ncode.syosetu.com/n3110j/2/>

参章 この時はまだ平和だったんですく有里 湊

エリザベスからカードを貰った翌日。

休みとあつてかラウンジの雰囲気はいつもよりゆったりとしていた。もうすぐみんなも降りてくるだろう。

昨日みんなにカードを渡し解散した後も、順平のやたらと高いテンションにみんなもいつのまにか影響されて話は弾みに弾んだ。

最後は桐条先輩に『いい加減に寝ろ』と注意されていたくらいだ。しかし当の桐条先輩自身が、二人が部屋に戻ろうとした時に、『その……最後に言っていたコ、コンボとはなんだ？』と聞く始末。

結局、順平、天田、風花による説明会が行われる。

意外にわかりやすい順平の説明。

未恐ろしい天田の理論。

マニアックな風花の戦略。

質問タイムの後はカードだけの順平vs天田の模擬戦が行われた。

夜遅くなってしまったが、おかげでみんなの理解度は飛躍的に高くなり、熟練者顔負けのデュエルが出来るまでになった。特にゆかりの成長振りには驚きだ。部屋に帰ってから何度も電話が掛かってきて質問攻めだった。結局最後にはベテラン顔負けのコンボや戦略を自分で立てていたもんな。

いつもはそんなに電話なんてしてこないくせに……と少し複雑ではあるが。

—— というか、こんな事している場合じゃないかな……

「ま、いいのではないか、湊よ」

オルフェウスが話し掛けてくる。ペルソナたちには隠し事は出来ない。心の、ホントに細かな機微すらばれてしまう。なんてったってペルソナたちは僕の心の海にその身をおいている。いわば心の中に住んでいるようなものだ。

「たまにはこういった娯楽も必要だろう」

「そうです。いつも湊様は己が身を削り、心を削り挑んでいるのですから」

ペルソナ、パールバティがオルフェウスに同意する。全く珍しい。いつも事あるごとに意見が対立する二人が全く同じ意見とは。

—— そうかもね。

「はい。心の娯楽もまた、日々生きて行くには不可欠な栄養。息抜きは必要です」

—— そうだね、パールバティ。

後はみんなが楽しんでくれるかが心配だったが、昨日の様子を見る限り心配なさそうだ。

「おはよ、湊くん」

「おはよ。どう上手く出来た？」

階段から降りてきたゆかりはまだ眠そうにも見える。

「まあ見ててよ。結構考えたんだから」

ま、ちょっと引つ掛かる所もあるけどね、とやや俯き、影を落とす独り言のように呟くゆかり。

「あれっ？ キッチンに誰がいるのかな？」

「そう言えばなんかいい匂いがするな」

ゆかりに言われキッチンに人の気配が在る事に気が付く。覗いてみると、やはり荒垣先輩だった。

キッチンで何かを作っている荒垣先輩。いつ見ても惚れ惚れする、かなりの慣れた手つきだ。

「おはようございます」

「おう」

ちよつとこわもての顔。そしていつものニット帽に、白いエプロン。このミスマッチがなんとも心地良い。こんな姿の荒垣先輩を見る事ができるのは、間違無くこの寮にいる者だけの特権だ。

「いゝい匂い。とんかつですか？」

「ああ？ まあな。サンドイッチでも作ろうかと思ってな」

ま、今日は暇だしな、と言いながら荒垣先輩は手際よくサンドイッチの具材を作っていく。

手際の良い作業という物は、料理に限らず見ていて楽しくなるもの

だ。僕とゆかりも、荒垣先輩の丁寧ながら流れるような作業に、感嘆の尊敬の意を持って見ていたのだが、どうやらそれは荒垣先輩にとって好ましくは無かったようだ。いや、ストレートに表現するなら照れくさいみたいだった。

「邪魔だ。お前らはラウンジ行つてろ。出来たら持つてつてやるから」

「手伝いま……」 「いらねーよ。お前らが行かねーと始まらねーだろ？ ほら、あっち行つてろ」

僕の申し出は、言い終わることすら許されない勢いで却下された。でも照れ隠しと共に優しさを端々に感じる言動。まったく荒垣先輩らしい。ここは先輩の心遣いを素直に、有り難くいただくのが後輩の務めだ。

「追い出されちゃったね」

「そうだね」

二人で笑いながらキッチンからラウンジに戻ると、みんな既に集まっております、話題はデュエルで持ちきりだった。

「関係書籍は全てスキャン済み、ありとあらゆる戦略をシミュレート済み。準備万端虎視眈々、どこからでもかかってこいであります」

はは、アイギスらしい。でも実際この手のゲームは得意かもしれないな。

「ふふつ、私も頑張っちゃいました。ちょっと自信作ですよ」

風花は柔らかく、朗らかに微笑みながらも自信を伺わせる。

「ふつ、たとえどんな勝負でも、まだまだお前たちに負ける訳には
いかないな」

「なんだ、明彦。戦略系遊戯で私に勝つつもりか？」

真田先輩も桐条先輩も準備は整っているようだ。

「へへっ、腕が鳴るぜ！俺のターン、ドローってな！」

「僕だって負けないですよ」

「ワンワン」

順平と天田もやる気満々だ。コロマルもなにかいつもと違う事が始
まるのを分っているのだろう。やや興奮した様子だ。キッチンには
荒垣先輩もいるしな。

ところで、昨日エリザベスも言ってたから気になっていたんだが……

「その『俺のターン、ドロー』ってなに？」

「ああ、漫画でな、自分の順番が回って来た時に言う台詞でさ」

そう言っデュエルディスクて決闘盤にデッキをセットする順平。

「こっやって、カードを一枚取って……」

『テレッテッテー 順平さんはレベルアップ』

順平が右手を上げたこのタイミングで、まさかの台詞を言い放つア
イギス。

『アイギスっっ！』

全員一斉にツツコむ。それは見事に声が重なっていた。

「いえ、順平さんが右手を上げたので、コレはタルタロス序盤で見える事が出来ないと言われている、例のポーズかと……」

「だからそんなの真似しちゃダメ。前に禁止って言ったでしょ……アホが移るよ？」

「了解であります」

容赦ないゆかりの一言。こと順平へのツツコミは絶品だ。アイギスとの掛け合いも良い。もっともアイギスはいたって真面目なのだろうが。

「またっ！ ゆかりツチ、アホはないっしょ！ アホは！ つか、なにげにアイちゃんもひどっ！」

「みなさん準備はいいですか？」

程よく場が和んだところで、そろそろ始めようかとみんなへと声を掛ける。それぞれ異口同音にOKとの返答。どうやら準備は整ったようだ。

「それじゃ、第一回、巖戸台分寮決闘王最強決定戦を開催します！」

沸き起こる歓声。ちなみに『巖戸台分寮決闘王最強決定戦』は順平命名だ。

その順平も天田と共になりに盛り上がっている。

真田先輩の表情からも興奮が伺える。ゆかりも風花も楽しそうだ。桐条先輩に至っては、普段あまり見る事のない、素の笑顔が見える。

「では、組み合わせから決めたいと思いますが……どうやって決めるようかな」

「あ、組み合わせのプログラム作る？ すぐできると思うから」

風花の提案。彼女の膝の上にはノートパソコンが起動し、既にコンパイラが立ち上がっている。

「ホント？　じゃあお願い。」

「人数は八人……ね。何かの条件は？」

「いや、まったくのランダムで」

「……じゃあこんな感じで」

風花の手が、物凄い勢いで動く。残像が見える……ものの数十秒でなにやら入力スペースのある画面が表示された。

「では、桐条先輩、Enterを押してください」

桐条先輩がEnterキーを押すと、ディスプレイには八人の名前がランダムに表示される。

フェードアウト、フラッシュバックと数秒で組んだわりにやたらと凝った造りの組み合わせ作成表。

やがて風花のノートパソコンには対戦表が表示された。

第一試合

有里　湊VS桐条　美鶴

「良い試合をしよう。有里」

「はい。こちらこそよろしく、桐条先輩」

第二試合

岳羽　ゆかりVS真田　明彦

「真田先輩とか……」

「岳羽か。言っておくが手加減はしないぞ」

第三試合

天田 乾VS山岸 風花

「風花さん、よろしくお願いします」

「こちらこそよろしくね、天田くん」

第四試合

伊織 順平VSアイギス

「おっ、一回戦はアイちゃんか。なかなかの強敵だな」

「誰が相手であろうと負けないであります」

こうして特別課外活動部最強を決めるべく、今、ここに熱い戦いが始まった。

参章〱この時はまだ平和だったんです〱有里 湊（後書き）

この番外編は別の視点でも書かれています。

。死神の破片version - 作：ぬじまき氏

<http://ncode.syosetu.com/n3110j/3/>

肆章　コンセントレイト・テンタラフ　桐条　美鶴

とてもここが、慣れ親しんだ巖戸台分寮とは思えないほどに、辺りは暗闇とも言える、暗黒の世界に様変わりしていた。左腕に付けたデュエルディスク決闘盤とやらが創り出した異空間だ。

この世界では、デュエルディスクとカードによって創り出された現象は半現実となる。

仮想現実、人工現実感、いわゆるバーチャルリアリティと違う最大の点は、炎は熱く、氷は冷たく、攻撃を放てば死に至るような深刻なダメージを受ける事はないが、ゲーム程度のダメージを受けるという事。どちらかというと実体を持った拡張現実に近いのだろうか。いずれにしろとんでもない技術だ。是非とも開発者を桐条グループへと招きたいものだ。

――　まずはいきなり有里……湊か。確かに強敵だが……いや、前向きに考えるとこれは良い機会か。たまには先輩らしい、かつこい所も……み、見せておかないとな。

私は対戦相手を目の前にしながら、かつての私なら絶対にしなかったであろう、妙な損得勘定をしていた。

――　やはり私は変わったな……

パラダイムシフト。今まで当然と思っていた事が、根底から、革命的もしくは劇的に変化する事を差す単語だ。以前よりこの言葉は知

っていたが、最近特に意識するようになる。
原因が分かっている。目の前にいる、この男だ。有里は私の中の何か（・・・）を変えた。

『それでは、よろしくお願いします』

「ああ、こちらこそ。では早速始めようか」
『はい』

だが遊びとはいえ、互いに真剣。油断は微塵も出来ない。いや、しない。全力で戦う事こそが礼儀だろう。静かに相手を見据え、浮ついた油断を心の中から一つ残らず消してゆく。
異空間に立つ二人。次第に緊張が高まって行った。

『決闘！！』

湊：ライフ4000

美鶴：ライフ4000

開始時のライフポイントは互いに4000。これが先に尽きた方が負けとなる。まずは相手のターンからだ。

『カードを二枚伏せ、凱旋の騎士を攻撃表示で召喚。ターン終了』

凱旋の騎士：皇帝

攻撃力：1800

守備力：600

—— ふん。最初は様子見つてところか。

モンスターが召喚されると共に、攻撃力と守備力を表す数値が出る。
最初のターンは攻撃が出来ない。

さて、相手は一体どんな戦略だろうな。ふふ。久しぶりに心躍る。
血が滾る。^{たぎ}

「私のターン、ドロー。……場にカードを三枚伏せ、リヤナンシー
を守備表示で召喚」

リヤナンシー：女帝

攻撃力：1400

守備力：1700

「さらに永続魔法カード、桐条財閥！ 場のモンスターが墓地に送
られるたび、私は一枚のカードを引けるようになる。これでターン
終了だ」

—— さあ、どうする？

「さあ、君のターンだ。君のモンスターの攻撃力は、私のモンスタ
ーの守備力を上回っているぞ」

恐らくこちらのリバースカードを警戒しているだろう。当然だ。
普通に攻撃すれば確かにリヤナンシーを破壊できる。だが、相手に

とって、問題はこちらの二枚のリバースカード。

この裏返しに伏せられているのは魔法か罠のカードで、相手のターンにも発動することができる。つまり単純な攻撃力と守備力の比較にはならない。

見えない危険を察知、推察、そして計略をめぐらす。これがこのゲームの楽しく奥深いところのひとつだ。

だが、目の前の相手はここで守備に回るような選択はしない事を私は良く知っている。あえて私の挑発に乗ってくる。そんな男だ。

『……ドロー。凱旋の騎士で、リヤナンシーを攻撃!』

—— ふっ！ やはりきたかつ！

だが甘い。突っ込んでくるだけでは勝負は勝てないぞ！こちらの思惑通りに事が運び、思わず左の口角が上がる。

「罠カード発動、足蹴！」

胸元が大きく開いたセクシーな衣装に身を包み、足元まである美しい金髪をなびかせる、アルカナ女帝のペルソナ、リヤナンシー。猛然と攻撃を仕掛けてきた凱旋の騎士を、微笑みながらリヤナンシーは蹴り飛ばす。

馬から落ちた凱旋の騎士。

見下ろすリヤナンシー。

リヤナンシーは音も無く脚をすうー、と上げると、いきなり凱旋の騎士を踏みつけた。そしてしばらくグリグリと足を動かした後、凱

旋の騎士は消滅する。

—— ふふふ、いいじゃないか！

このカードゲーム……ポーカーともブラックジャックとも違う、なにかこう言葉に出来ない快感があるな。

「モンスターの破壊により、カードを一枚引くぞ……ラミアを守備表示で召喚、ターン終了」

ラミア：隠者

攻撃力：700

守備力：2000

「ふむ、動揺は無しか。だが私のターンになってもそれが続くかな？」

まだ完全に流れが来ている訳ではないが、その予感ひしひしと感じているだろう。だがな、早く手を打たないとチェックメイトだぞ？

「ドロー！ 魔法カード、マリンカリン！ 敵モンスター一体をこのターンの間コントロールする！」

『……！！』

少し予想外だったのだろう。まともに表情が変わった。しかし私に

とつては予定通り。このまま一気に進める。

マリнкаリンで一時的に相手から所有権を奪い、モンスターを生贄にして破壊。

更に自軍のモンスターも生贄に捧げて墓地に送ることで、場により強いモンスターを召喚することができる。

「続けてこの二体を生贄に捧げ、アリラトを召喚」

アリラト：女帝

攻撃力：2700

守備力：2200

アルカナ女帝最強のペルソナ、アリラト。四面の石を象徴として崇拜されていた為、アリラト自身がどのような姿かは誰も知らない。ペルソナも四面の石の姿をしている。

「プレイヤーへの直接攻撃！」

『甘い……畏カード発動、カウンター』

やはりそう来たか。だが、やはり甘い。その程度の事、予測をしてないとも思ったか？

「フツ、甘いのはどっちだ？ 追撃畏カード発動、遮光器土偶！」

『そ、それ前にプレゼントした……』

「ああ、この色、形、デザイン、どれをとっても素晴らしい。これを身代わりにしなければいけないのは心苦しいが……勝負の世界だ。仕方ない」

カウンターで直撃するはずだったアリラトへの衝撃は、土偶によって防がれる。砂煙の中からは猛スピードで一直線に対戦相手へと向うアリラト。

——アリラトは……強いぞ

『ぐああっ!!』

湊：ライフ4000 ↓ 1300

苦悶の表情の有里。アリラトの攻撃力分のライフを削る。

『ドロー……場にカードを一枚伏せ、ベイルライダーを守備表示で召喚。ターン終了』

ベイルライダー：死神

攻撃力：1800

守備力：0

一枚のカードを引いた。残りライフや状況を単純に考えると私が優勢だ。しかし相手はの眼光はまだ死んでいない。ここからの逆転を考えている目だ。だが問題無い。私も最後の一瞬まで一切の油断はしない。

「私だな、ドロー。カードを一枚伏せよう。……有里」

『なんでしょう?』

「守備力が無いモンスター、もし私がなにか下級モンスターカードを引いていればどうするつもりだった?」

そう。普通ならベイルライダーを守備表示にしまつては、どんなモンスターに攻撃されても破壊されてしまふ。そうすれば、アリラトの攻撃が素通りし負けは決定だ。

『……罾の餌食ですよ』

やはり……な。この男は諦めてなんかいない。今確信を持った。なにかまだ策を持っている。

「違うな。私のデッキにモンスターカードが少ないということを君は見抜いている。アリラトでベイルライダーを破壊しにくる確率が高いことを」

わずかに表情が歪む。凶星……か。

「壁モンスターか、はたまたリバーズカードの仕掛けがあるか……あえて誘いに乗ろう。アリラトでベイルライダーを攻撃!」

『リバーズカード発動、装備変更!』

アリラト：女帝

攻撃力：2700 ↓ 2200

守備力：2200

ベイルライダー：死神

攻撃力：1800 ↓ 2300

守備力：0

私が攻撃宣言した瞬間、出されたカードは“装備変更”。攻撃力の一部が、アリラトからベイルライダーへと委譲されるカードだ。これでベイルライダーの攻撃力がアリラトを上回る事になる。だが現在ベイルライダーは守備表示。これはどうクリアする？

『続けてもう一枚、終末の予言！フィールドのモンスターは全て攻撃表示になる』

なるほど。“終末の予言”か。モンスターをやケクソ状態にし、強制的に攻撃表示に変える魔法。これでベイルライダーはアリラトを攻撃できるな。

でも残念だったな。それでは一手足りない。

「フツ……リバースカードオープン！ テンタラー。このターン全ての魔法と罠は使用できなくなる」

『……！』

「私相手に……心理戦で勝てると思っているのか、有里？」

——だがこれも勝負。悪く思っな。

相手が使用するはずだった二枚のカードが、再び場に伏せられる。再び守備表示になったペイルライダーにアリラトは容赦なく攻撃を仕掛ける。消滅するペイルライダー。

「ペイルライダー、撃破。守備表示に戻ってしまったのは残念だがな。モンスターの破壊によりカードを一枚引いてからターン終了だ」
守備表示のモンスターが破壊されても相手のライフポイントにダメージはない。しかもテンタラーを使用した。もっとも相手のリバーカードの内容は分かったが。

さすがに少し意気消沈したかと、ちらりと有里の様子を見る。よかった、大丈夫だ。そこまで気落ちした様子はない。

——ん、大丈夫？

勝負の真つ最中に、なぜ相手を気遣っているんだ、まったく。
“悪く思うな”なんて行っておきながら、相手の事が心のどこかで引つ掛かっていた。一枚のカードを相手が指に挟んだところでふと我に返る。対戦相手は全く戦意喪失していない。そして勝負は続行中。いつから私はこんなに甘くなつた？
おもわず自分の変わり様に苦笑する。

『ドロー………ついてるな。魔法カード、買い出し。三枚カードを引く。カードを一枚伏せてナルキツソスを召喚、守備表示でターン終了』

ナルキツソス：恋愛

攻撃力：700

守備力：1500

なんだ？ それに何の意味がある？ ヤケクソや手違い等という事がないと思うが。まあいい。こちらは油断なく進めさせてもらおう。

「リバースカードを一枚加えたか。だが、無意味だぞ……ドロ。まずカードを一枚伏せる。……このターン、私は二枚の魔法カードを使うぞ。一枚目は、このカードだ」

私が出したカードは、時価ネットたなか。だがこのカードにまさかの反応を示す。

『……え？なんでそんなものが』

驚いた表情。いや、意外な表情とでも表現すべき深藍の瞳が私を覗き込む。

——しまった。みんなには秘密にしてるんだった。

「ち、違う、決して毎回チェックしているとか、挙句株主になったなんてことはっ！！」

あ————っ！

なにを言ってるんだ私はっ！ 局全部説明してしまったではないかっ！

って、何にやけてるんだっ！

いや、……落ち着け。切り替える、焦っては負けだ。こんなトコで隙を作ったら間違いなく狙われる。

「お、おほん。と、ともかく、このカードの効果は敵の伏せたカードを一枚、奪うことだ」

『くっ……』

「貰うのは、真ん中のカード、つまり終末の予言だ。……意外か？ 得体のしれない伏せカードを取り除くと思ったか？」

『……まあ』

「違う。私はこのターンで決着を付けるためにこのカードを選ぶのだ！」

にやけた罰だ。ここで……

「この魔法を直ちに使い、クイーンメイプは攻撃表示となる。さらにリバーカードオープン、コンセントレイト！」

コンセントレイト。

ターン終了時まで攻撃力が1.5倍となる増強魔法。アリラトの攻撃力が1.5倍、つまり4050となる。

そして攻撃力の差、4050 - 700 = 3350で、相手の残りライフポイントを上回る。

トドメを刺すには十分な数値だ。

「終わらせるっ！」

『まだですよ、美鶴さん』

—— 何？

相手のリバースカードは二枚ある。一枚は先ほど使おうとした、装備変更。しかしそれを使ったところで状況は変わらない。だとすれば……もう一枚の方が。

『美鶴さんが伏せているもう一枚のカード、それはこちらの罠や魔法を打ち消すことができるものでしょう？ だから僕の伏せたカードを無視して勝負を決めにきた』

—— くっ！ 読まれていたか……

『でも裏目でしたね。罠カード発動、おかしなAI！』

おかしなAI……だと？ なんだそれは？ AI……とはなんだ？
なにかの略か？

『このカードの効果は魔法カードの効力を打ち消すことができる。しかも……』

しかも……の後、次の言葉を必要以上に勿体つける。嫌な間を空ける。再び心理戦のつもりか。いや、それよりもカードの効果だ。カード名からは全く予想がつかない。

『この罠は、他のカードの干渉を受けない……消されることがないんです』

「何だと！？ 何故そんなカードが……」

『多分、アトラスが仕様ですと言い張ったんでしょうね』

「なんだそれはっ！」

『加えて、この罠が発動した時に、相手墓地の一番上にある魔法カードを僕の手札に加える』

このターンに使用した魔法はまだ発動中で、墓地に行つてはいない。つまり手札に入るのは、テンタラフー。その意味を良く分っているのだらう。目の前の対戦相手はほくそ笑む。

—— してやられた……

このカードはリバースカードを封じる、私にとって最も嫌なカードだ。

胸の中心から一気に込み上げてくる赤いモノ。怒りにも似た、悔しさとも表現できる、後悔とも置き換えられる感情。心が一気に熱くなる。

「湊、おまえっ！……あっ！」

—— はうっ！ しまったああああー！！

つい熱くなってしまった。人前で湊と大声で呼んでしまった。

私とした事が何たる失態……

耳まで真っ赤になって、顔が熱く火照っているのが自分でも分かる。

だめだ。もう……恥ずかしくて死にそうだ……

いや、落ち着け。とにかく、とにかく落ち着け。
こんな時こそポーカーフェイス。私は何時だつてどんな事も乗り越えてきたじゃないか。今回も……乗り越えるんだ。
まずは……そう、状況確認、状況確認だ。デュエルに夢中でひよつとしたら案外誰も聞こえていなかったかもしれない。怪しまれないよう、そつと周りの様子を見てみよう。

—— よし、当然明彦は気付いていない。伊織、アイギスも大丈夫のようだ。問題はゆかりだ。ゆかりは、ゆかりは……と

瞬間、鋭くなにかよく分からないモノに貫かれた錯覚。タルタロスでも感じた事のない、殺気とも重圧とも違う感覚が私に向けられている。あわててそちらを振り向いた。

—— なんだあれは…… 山岸が、山岸が、山岸が……

それを見た瞬間、思わず体を硬直した。

『さらに装備変更も発動、これでこのターンは、凌げる』

アリラト：女帝

攻撃力：2700 ↓ 2200

守備力：2200

ナルキッソス：恋愛

攻撃力：700 ↓ 1200
守備力：1500

だがそんな事は当然お構いなしに湊は先を続ける。完全に集中が途切れているが、無理にでも勝負に意識を向ける。まだ勝負の真つ最中。私もいつまで動揺している訳にはいくまい。

「アリラト、攻撃だ」

湊：ライフ1300 ↓ 300

アリラトの一撃にナルキッソスは消滅する。破壊される。

—— くそ……決めるつもりだったのに……

一息ついて、心落ち着かせようとしていたところに、対面の敵から、ボソッと一言。

『湊って……』

私だけに聞こえるよう、小さな小さな声でつぶやく。それが逆にいやらしい。

「今、言っなっ！」

恥ずかしさもあって、つい大声で過剰に反応してしまう。流石に今

の聲で周りも気付いたのだろう、不思議そうな顔をしている。くそ……これが作戦だって分かっているのに釣られてしまった。

いや、落ち着け。とにかく、とにかく落ち着け。私は何時だってどんな事も乗り越えてきたじゃないか。

湊を睨み、仕切りなおす。

「も、モンすたーが破壊されたから一枚カードを引かなければなら……」

も、モンすたー……声が裏返ってしまった。しかもデュエルディスクからカードを引くことができない。

—— 落ち着け、落ち着け！

「あ……」

ようやく抜けたと思ったら、今度は左手に装着してあるデュエルディスクから、一枚しか取れないはずのカードを一気に十枚程取ってしまう。

『……い、いや、いいですから。僕は気にしないのでそっと元に戻してください』

「そうか………すまない」

カードをもう一度ディスクにセットする。まったく………情けない。もう恥ずかしいは通り越した。ただ情けない。

「くっ、私としたことが。これしきのこととで動揺するとは……」

なになが、 “たまには先輩らしい、かつこいい所も……み、見せておかないとな” だ。
切り替える、桐条美鶴。

少し目を瞑る。

心を落ち着かせる。

深呼吸を一つ。

心に水面を思い浮かべる。

今はまだ荒れている。

二回目の深呼吸。

三回目の深呼吸。

よし。激しく荒れていた心の水面に乱れは無くなった。

すうーと目を開ける。目の前には深藍の瞳を持つ対戦者。前髪に目がかかっている。

―― 仕切りなおしだ。

「エンドだ！ このターンで決めることは出来なかったが、私の有利な状況に変わりはない！ 必ず勝ってみせる！」

『それは、どうですかね……ドロ……ピクシーを守備表示で召喚。』

特殊効果で、僕のライフが500回復する』

ピクシー：恋愛

攻撃力：300

守備力：500

湊：ライフ300↓800

『そして魔法カードを二枚。まずはテンタラー、リバーズカードを封じます』

「むっ……」

—— やはり来たか……

おそらくそのカードが切り札なんだろう。だが、言い換えればそれを凌げば私の勝ちだ。

『そして二枚目が、ホムンクルス。……攻撃力と守備力が500以下のモンスターの身代わりとなる』

ホムンクルスがピクシーの姿を形どり、増殖する。その数、全部で十体。増殖したモンスターは生贄に使うことも、攻撃に参加させることもできないが、アリラトの攻撃はこれで封じられた。

『エンドです』

「なんだ、それで終わりか。所詮は時間稼ぎに過ぎぬではないか…

…ドロー…カードを一枚伏せ、ダークイーグルを召喚」

ダークイーグル：女帝

攻撃力：1500

守備力：1400

「二体で攻撃！」

ピクシーの身代わりが二体、破壊される。

—— なんだ、本当に時間稼ぎ……か？

モンスターが破壊されたので、カードを二枚引きながら、あらゆる可能性を考える。いや、この男が単なる時間稼ぎをする訳がない。時間稼ぎをしているなら……それは意味のある時間稼ぎなんだ。

—— 一体何を狙っている？

「エンドだ。この身代わりが全て無くなるころには、私の手札もリバースカードも充実していることだろう。これで終わりか？」

『いえ、まだまだ。ドロー……ナタタイシを召喚、伏せカードタルカジャで攻撃力を増強、ダークイーグルに攻撃』

ナタタイシ：戦車

攻撃力：1800 ↓ 2300

守備力：1200

—— ん？ なんだ、この違和感は……

何かが引つ掛かる……そう思わす事が作戦か？ が、わたしが有利な事は変わっていない。場に何かを進めている気配もない。

ここは湊の出したナタタイシを罠で破壊することも出来るが、攻撃表示のモンスターを場に残して湊のライフを削る。そちらの方が得策だな。

ナタタイシの攻撃。ダークイーグルはなす術もなく破壊された。

美鶴：ライフ4000 ↓ 3200

『カードを一枚伏せて、エンドです』

「私のターン、ドロー。カードを一枚伏せ、虚栄のマーヤを召喚。ナタタイシにアリラト、ピクシーに虚栄のマーヤで攻撃」

虚栄のマーヤ：女帝

攻撃力：1300

守備力：1700

『罠発動、トラエストジエム。アリラトを手札に戻します』

「対応して、マラカカーン。魔法が罫を一つ打ち消す」

——ここは読んでいる。だが……

湊：ライフ800↓400

罫は消され、湊のモンスターは二体破壊される。しかし湊は、淡々とした表情を崩さない。まるでここで罫が消される事、ライフが減る事も想定内とばかりの様子だ。相変わらず驚くべきポーカーフエイス。さすが、特別課外活動部、現場司令塔といった所か。

「……エンドだ」

——なんだ？ 全く分からない。何を企んでいる？

『ドロー。エンドです』

だが湊は何もせずにターンを終える。

「……一体何を考えている？」

『さあ、なんでしょう』

「……ドロー、二枚カードを伏せ、生成の彫像を召喚、三体で攻撃だ」

今度は三体まとめたの破壊。残りのピクシーは四体。

「……確か、八枚以上の手札は捨てなければならないんだっとな。
仕方ない」

リバースカードも既に五枚で満杯になっている事もあり、モンスター破壊に合わせて引いたカードを含めた手札から二枚を選んで捨てる。

「エンドだ」

『ドロー、ジャックランタンを召喚、特殊効果発動でデッキからジャックフロストを特殊召喚。ともに守備表示。エンドです』

ジャックランタン：魔術師

攻撃力：1100

守備力：800

ジャックフロスト：魔術師

攻撃力：1000

守備力：600

確かあのペルソナには特殊能力があったはずだ。何度かタルタロスで見た事がある。それを守備表示だと？

—— ええい、惑わされるな。

何も考えず突っ込むのは愚か者のする事だが、考え過ぎの挙句、幻に恐怖するのもまた愚の骨頂。なにかを企んでいるのなら、それが

構築されるまでに叩き潰すまでっ！ 状況はあと一撃という所まで進行しているんだ。

「行けっ！」

襲いかかる女帝たち。ジャック兄弟、加えてピクシーも一体破壊。これなら次のターンで、ピクシーも全て破壊できるだろう

「エンドだ」

『ドロー……チッ。エンドです』

思わず舌打ちをする湊。ここまで露に焦りの感情を見せたのは初めてだ。やはり何かを仕掛けようとはしているが、それはまだ完成に至っていない。ここは迷わず速攻だ。

「フッ……成すすべなしか？ 攻撃！」

最後の三体のピクシーを破壊。さあこれで湊を守るモンスターはいなくなった。

「エンドだ。さあ、次のターンで止めを刺すぞ」

『……ドロー！』

引いたカードを見て明らかに落胆した様子の湊。今回も必要なカードは来なかったという事か。しかし次に湊がとった手段は、少々予想外の手段だった。

『魔法カード、リセット！ 両プレイヤーは、今の手札を全て捨て、同じ枚数のカードを引く』

「何？」

湊の手札は二枚、私はの手札は七枚。それぞれカードを引きなおす。

『……インキュバス召喚、守備表示。ターン終了』

インキュバス：悪魔

攻撃力：1400

守備力：1700

結局一枚、守備表示にして湊のターンは終わった。

「どうやら、最後の手札交換も無駄に終わったようだな。ドロ……
…そしてアリラトでインキュバスに攻撃だっ！」

ピンク色の体をした男の淫魔、インキュバスに向ってアリラトは迷うことなく一直線に突き進む。インキュバスの真正面からアリラトは突撃、一瞬で貫き破壊した。

——勝った。

今度こそ勝利を確信した。湊の場には伏せカードもモンスターカードもない。真正銘何も策は無い。優れた戦略家である湊の手の内が見えずに不安だったが、なんとかここまでこぎつけた。これで先輩としての威厳も保てたというものだ。

—— まったく、最近彼には弄ばれてばかりだったからな。

だが、これで立場を元に戻すことができるはずだ。意外と不快では無かったのだが……むしろ嬉しくもあつたりして……いや、それでもやはりケジメは付けるべきだ。

うむ。先輩らしい所も見せられただろう。

「トドメは二体でさしてやろう。行け！」
『待ってください』

湊の声に心臓が凍りつく。背筋に悪寒が走り貫く。言いよつの無い不安が一気に私を侵食して行つた。

—— なんだ、このタイミングで何を言い出す？

何もない。何もないはずだ。

何度も何度何度も何度も確認した。

あらゆる角度から、あらゆる可能性をシミュレートした。

湊の手札、場に出ているカード……もう何も、どうしようも無いはず。

なのに……なんだ？ この不安は……

「……なんだ？」

振絞るように声を出す。目に映るのは余裕の表情、いや、いつもの

表情の湊。

『僕のモンスターが破壊されたんですから、カードを引いてください。もつとも……』

湊は口元を歪めて、美鶴に語りかける。

『カードを引くことができるのなら、ですけど』
「何を言って……な!？」

—— なん……だと!

無い。カードが一枚も……無い。

『正直言つて、先手を取られてから美鶴さんの罠デッキを倒すのは、不可能に近い。永続魔法、桐条財閥によってカードの補充も素早く行われる』

でも、と湊は続ける。

『カードの補充が速いっていうことは、デッキが無くなるのも速いということです。まあピクシーとホームンクルスのコンボでかなり加速させましたけれど』

デッキからカードを引くことが出来なくなった瞬間、そのプレイヤーは負けとなる。

どんなに有利な状況であろうと、だ。

『美鶴さんは頭脳明晰ですけど、こんな勝ち方があるなんて考えもしなかったでしょ？ 思いつきませんよ、カードゲームに慣れた人でないかね』

まるで、推理ドラマの終盤のように、カラクリを説明する湊。全く……想像もしていなかった。

策は……私のデュエルディスクに仕組まれていたんだ。いくら湊の手札、場を見てそこから繰り出される策を考えても無駄だったとはな。

『僕の勝ちです、美鶴さん』

その宣言と共に、異空間からラウンジへと転送される。

—— たいしたものだ。

「まったく、してやられたな。こんな戦略があるとは……しかも自滅とはいえ余計な恥をかいてしまった」

「すいません、ちよつと悪ノリし過ぎました」

「まったく……少しお詫びをしてもらわないとな」

—— そうだな……な、なにがいいかな……こんなチャンス滅多にないし。

……

……

—— そうだ、これなら不自然じゃない。そうしよう、これにしよう

う。

「では、……後で、こ、紅茶でも淹れてもらおうか……な」

言ってて結構恥ずかしいが……ここで目を逸らす訳にはいかない。
しっかりと湊の目を見つめ、そして湊からの返答をじっと待つ。

「はい、よろこんで」

私の目に映ったのはとても素敵な笑顔の湊だった。

肆章「コンセントレイト・テンタラフ」桐条 美鶴（後書き）

この番外編は別の視点でも書かれています。

○死神の破片version - 作：ぬじまき氏

<http://ncode.syosetu.com/n3110j/4/>

伍章くやべえもん見ちまつたく荒垣 真次郎

荒垣真次郎。

特別課外活動部初期メンバーの一人で、現在は休学中だが月光館学園高等部3・Cに籍を置く。

休学してからは、以前湊、ゆかり、順平が風花の怪談騒ぎの際、情報集めの為訪れたポートアイランドにある、通称“溜まり場”にいる事が多かった。

夏でも赤いロングコートとニットキャップというこだわりのファッション。

……噂では夏場はコートの中は薄着らしい。

目つきは鋭く、気の弱い者は睨まれただけで動けなくなるだろう。声のトーンは低く迫力がある。気の弱い者なら声を掛けられただけで謝るだろう。発せられる雰囲気は鋭く、重く、攻撃的だ。

実際ケンカ、戦闘ともに相当強い。まさに溜まり場の住人に相応しい風貌、声、雰囲気、そして実力だ。

だがこれでは荒垣真次郎を語るには決定的に足りていない側面がある。

あくまで見た目を語っているに過ぎない。

あくまである一つの角度から彼を見ているに過ぎない。

彼は良い人である。

蔵戸台分寮のキッチンに、食欲をそそる香りが広がっている。順平のカップラーメンのお湯を沸かす程度にしか使われていなかったが、ここ最近、主が再び戻ったキッチンは本来の役目を果たしていた。

「さて……っと。下ごしらえはこれで済んだか」

中心には仁王立ちする男が一人。その姿は黒いニット帽に白いエプロン。彼の目の前には色とりどりの具材がずらりと並んでいた。どうやら具材は一通り完成しているようで、後はパンに挟んで切るだけだった。

—— 向こうは、どうなってるんだ？

様子を見るために、荒垣は作戦室へと向かう。そのモニターで、デュエルしている姿を見れると聞いていたからだ。

「……こりゃすげえな」

画面を見て、荒垣は思わず唖る。四分割された画面には、それぞれの対戦の様子が映し出されていた。それがまるで漫画の世界のような光景だった。CGを合成しているかのような立体映像は、現代の技術とは思えない。

—— というか、どう考えても無理だろ、こんなもん。

湊が銀髪の美女がなんとかと言っていたが、おそらくその女の仕業だろう。一体何者か見当もつかないが、人知を超えた何かであることは間違いない。

「ん、まだ中盤か」

上段左に映し出されていたのは桐条 美鶴VS有里 湊戦。美鶴が召喚したアリラトが唸りを上げ、とんでもない速度で湊へと向って一直線に突き進んでいた。アリラトの攻撃をまともに受け、苦痛に歪む湊の表情。

怪我したりする事は無いそうだが、受けたダメージを擬似感覚的に再現するそうだ。まったく。本当にトンデモない技術だ。

視線を少し右に移すと、上段右には真田 明彦VS岳羽 ゆかり戦が映し出されていた。

「……アキ」

悲しい程に一方的な展開になっていた。荒垣は軽く頭を抱えながら戦況を見つめる。

—— バカの一つ覚えみてえに攻撃を繰り返してやがる……

『いけ！ カエサル！ ラヴァーズに攻撃だ！』

『大天使の加護の効果発動……ビンゴ！』

あっさりと無効化される攻撃。そして……

『……私のターン、嫉妬のクビドの効果発動』
『ぐああ!』

真田のライフゲージは0となり、程なくして画面上から二人の姿が消えた。真つ暗な画面を見ながら荒垣は大きく溜息をついた。

下段左側は伊織順平VSアイギス戦だ。

理詰めで攻めるアイギス。順平は少し押され気味か。

——ん？

扉の向こうから耳に馴染んだ男の声が聞こえてくる。

「くそっ……この俺が勝負に負けただと？納得がいかん……」
「戦略の一つも無しに戦つてりゃ、負けるに決まってるんだろ」

作戦室へと入って来た真田、ゆかりの両名。無然としている真田に、荒垣は容赦ないツツコミを入れた。一方、ゆかりはまわりの状況を確認すべく荒垣に質問をする。

「荒垣先輩、他どうなってます？」

「ああ、お前ら以外は接戦みたいだが……。ん？」

上段左の画面。やや押し気味に進めていた美鶴が、一気呵成に湊に攻撃を仕掛けた。この攻撃が通れば、湊の負け。だが巧みな畏戦略により、湊はそのピンチを切り抜けた。

『湊、おまえっ！……あっ！』

画面から、動揺した美鶴の声が聞こえてくる。

「……桐条の奴、動揺してやがる」

確か美鶴は、湊のことを有里、と名字呼びだったはずだが、二人の時には違うのだろうか。いずれにせよ、多少の想定外で取り乱すとは、美鶴もまだまだだ。

「美鶴先輩、いま湊って……。別に、いいんだけどさ。湊くんももう少し、無頓着にならないで欲しいっていうか……」

隣ではゆかりが何やらぶつぶつ呟いているが、痴話喧嘩に興味がない。

——あと十分もすりゃ、大体終わんだろ。そろそろ下に戻って準備を……んあ？ な、なんだあ！？

何気なく視線を下した荒垣は自分の目を疑う光景に出くわす。

下段右側のモニター。山岸 風花 VS 天田 乾戦だ。

画面に映る風花から、禍々しい黒いオーラが生まれている。

『湊……？ そう、そうなの。貴方は桐条先輩にも手を出してたのね……。この女の敵が』

オーラだけでなく、聞こえてきたセリフにも不穏な気配がする。

―― 聞いてねえ！ 俺は聞いてねえ！

荒垣は逃げ出す様に作戦室を飛び出て、キッチンへと戻った。恐怖を振り払うように、サンドイッチを作る作業に集中する。

―― 落ち着け。山岸があんなふうになるわけがない。きっとシステムのトラブルか何かだ。

自らにそう言い聞かせ、荒垣はなんとか平静を保とうとする。あれは現実のものではない、と。邪念を振り払い、ようやく心を落ち着けたころには、サンドイッチの山が完成していた。

「……持ってくか」

あまり作戦室に戻りたくないのだが、せっかく作った料理を腐らせる訳にもいかない。恐る恐る作戦室の扉を開ける荒垣。

「あ、荒垣先輩。ひよっとしてお昼作ってくれたんですか？」

「ん、まあな……」

真っ先に荒垣を迎えたのは、いつもの優しい笑顔の風花だった。

「真田先輩とゆかりちゃん、部屋戻っちゃったみたいなんで、私が持っていきますね」

「ああ、頼む」

いつも通りの、風花らしい気配りの良さ。とたとたと部屋を出ていく可愛らしさもいつも通り。やはり先ほど風花の雰囲気がおかしく見えたのは、気のせいだったようだ。

……と、思ったのは大間違いだったと、すぐに思い知らされる事になる。

「あ？ どうした天田？」

ほっと安堵したのもつかの間、荒垣は目を伏せたままじつと動かない天田を見つけた。何かに怯えているかのように、天田のその小さな体は小刻みに震えていた。

「お、おい大丈夫か？」

心配した荒垣は天田に駆け寄る。

「うあ、ああ……」

だが、それに対する反応は嗚咽だった。

—— あ的那天が泣いてる？ 一体何が……。

多少の辛いことでは、決して折れない心を持つあの天田がここまで追い込まれるとは。一体どうしたというのだろうか。

「何があつた？」

ぎこちなく天田の頭に手のひらを載せ、天田に顔を上げさせた。天田はピクリと震えたが、その手を跳ね除けることなく受け入れる。つまりそれほどの何かがあったという事だ。

「風花さんが、風花さんが……」

「山岸がどうした？」

「最初は、普通だったのに、途中から急に怖くなって……風花さんがあんなになるなんて……」

少しは落ち着いたのか、なんとか言葉を紡ぎだす天田だったが再び詰まってしまう。どうやら、自分が画面越しに見たものは現実であつたらしい。それを間近で見てしまった、このいたいけな少年の恐怖はどれほど大きいものだっただろう。

「大丈夫だ、ほらその、なんだ。たまに機嫌が悪いことくらいあるだろ」

「……ひつく」

「別にお前が悪いことしたわけじゃねえんだから……」

「……ひつく」

「も、もうきつと元通りになってるって」

「……ひつく」

ほとんど灰と化している天田を、なんとかなだめようとする荒垣。しかし必死なその言葉も、残念ながらろくに天田には届いていないようだ。ひたすらに泣きじゃくる天田を目の前に、荒垣は途方にくれる。

「納得いきません！私の判断が間違っていたとは思えません！」

「カードゲームにはな、アイちゃん。流れてもんがあんだよ……」
「じゃ、美鶴さん、お茶入れてきますね」
「ふむ、期待しているぞ」

ちようどそのとき他の面々も試合が終わったようで、揃って作戦室へと上がってきた。皆それぞれに色々な表情を浮かべている。

—— 頼むからこれ以上荒立てないでくれよ……

いまだ回復の兆しが無い天田を見つつ、荒垣はまた一つため息をついた。

伍章くやべえもん見ちまつたく荒垣 真次郎（後書き）

この番外編は別の視点でも書かれています。

○死神の破片version - 作：ぬじまき氏

<http://ncode.syosetu.com/n3110j/5/>

陸章く責任者……つか作者出て来いっ！く岳羽 ゆかり

決闘盤を左腕には着け湊君と向き合う。

この手のカードゲームは昨日初めて知ったんだけど、湊君が持ってきたものだし、やっぱここは率先して盛り上げなくちゃとか考えて昨日も遅くまで頑張ってみたんだ。まあ、やってみたら意外と面白かったんだけど。

それなのに……

『じゃ、始めようか』

「うん。負けないよ」

『デュエル
決闘！！』

ルーレットの結果、先攻は私。

—— よしっ！

心の中でガッツポーズ。目の前にいる湊君からは全く気負いを感じていない。つまり、私相手に苦戦や、まして負けるなんて考えていない。私が付入るならそこ。1ターンでも速い方がいい。早く必勝パターンを構築しないと。

「私からね！ カードを一枚伏せ……フィールド魔法『法王の間』」

フィールド魔法とは、場にいる敵味方問わず全てに影響のある永続魔法。その影響は特定のペルソナ、シャドウにとって有利に働く。発動と同時に、周りの景色が再構築されてゆく。

それは見覚えのある部屋。出来れば無かった事にしたい忌まわしい記憶。

—— というか、自分で出しておきながら、すごい抵抗あるんですけど。

『あの、ゆかり？ ラブホテルの中でデュエルというのはどうかと……』

湊君がもつともな事を言う。私もそう思う。でもね……

「し、仕方ないじゃない。私に渡されたカードでデッキ作ったら、絶対必要なんだから！ 私だってこんな不潔なところでやりたくないわよ……」

そう。周りは完全に七夕の作戦時に突撃したあのラブホテルの一室を再現。あの、につききラヴァーズがいた、あの部屋。思い出し腹立ちをする位ほんと完璧。

むしろこのゲームを作った人になぜこんなの作ったのか……
そして私のデッキになぜ入れたのか……

問い詰めたい。こんこんと問い詰めたい。その上で文句を言いたい。思い出すだけでも顔が赤くなる。この部屋じゃないとはいえ、例えば操られていたとはいえ、私ってば湊君に……

—— ああ、もうやめやめっ！

割り切れ！　これは勝負なんだ。昨晚散々悩んだ挙句、結局デッキに入れると決めたじゃない。今更考えても仕方ない。

「このフィールド、法王の間ではアルカナ属性が恋愛のペルソナ、シャドウは守備力が300上昇するの。私のデッキには最適よ。さらにクイーンメイブを守備表示で召喚してターンエンド」

クイーンメイブ：恋愛

攻撃力：700

守備力：1800 ↓ 2100

『僕のターン、ドロー』

湊君は自分の手札六枚と、私の場に出ている二枚のカードを見ている。多分、私が裏返しているカードを警戒してるんだろうな。桐条先輩に心理戦で勝っちゃう位だから、私じゃ湊君に心理戦で勝つのはゼツタイ無理。

だから……気付かれないうちに速く。

湊君はこちらの思惑を知ってか、知らずか、何かしら方針が決まったのだろう。さっきまでの何かを考えるような、探るような目つきから行動への決意が灯る表情へと変化する。

『場に二枚のカードを伏せ、ジャックランタンを召喚！』
『ヒホ！』

ジャックランタン：魔術師

攻撃力：1000

守備力：800

『そしてジャックランタンの特殊能力発動！ デッキからジャックフロストを特殊召喚する』

「くっ……速い」

ジャックフロスト：魔術師

攻撃力：800

守備力：600

『ミックスレイド、ジャックブラザー！』

「……！！」

—— そうだった。ミックスレイドがあるんだった。

目の前で始まる、ジャックブラザーズによるショットコント。面白かったのか、それともつまなくてこけたのか分かんないけど、とにかくそれを見たクイーンメイブが体勢を崩す。

「クイーンメイブが！」

『この二体の特殊能力は、相手モンスター一体をそのターンの間だけ身動きをとらせなくすること。つまりこのターン、ゆかりは無防

備だ』

クイーンメイブが戦闘に参加できない以上、いま私を守るモンスターはいない。

『二体によるプレイヤーへの直接攻撃!』

ジャックフロストとジャックランタン。言ってみれば雪だるまとかぼちゃ。二体の可愛いらしいペルソナが『ひほー』とか言いながら私に向ってくる。

——可愛いけど……来たっ!

痛みに対する覚悟を決める。歯を食いしばり、両手に力を入れる。

「きゃあ!?!」

ゆかり: ライフ4000 ↓ 2200

二体の魔術師による攻撃が、プレイヤーである私に直撃した。

—— いったあーい。

ちよ、マジ、シャレになんない。何で痛みまで再現しちゃうワケ? 痛みなんていらなくない?

心の中で目一杯愚痴りながらも、でも痛みに耐えるしかない。ここでこのカードを使う訳にいかない。

目に映るのは私の前にある裏返している一枚のカード。やはり湊君にとってもその存在が不安だったのだろう。ふと見ると安堵感からか、目つきが僅かに柔らかくなっている。

恐らくさっきの攻撃でなにか私が仕掛けてくると思っていたのだろう。でも何も起こらず、攻撃は私にまで達した。特に罠ではない――ひよっとしたらそんな風に思ったのかもしれない。

桐条先輩は湊君の戦略や戦闘心理を読んで戦っていた。でも私は違う。残念ながら私には数手先を読むとか出来ない。でも桐条先輩に出来ないけど私には出来る事がある。多分湊君も気付いてない。

私が――湊君が、今どういった心境なのか少しは分かるようになってる事を。

『……ターンエンド』

その宣言と同時に、クイーンメイブが体勢を立て直す。これで状況はまた五分。ある意味、予定通りではある。いや、最悪の想定に比べたら状況はだいぶマシか。

「私のターン、ドロー。魔法カード、ディアラマ！ ライフを800ポイント回復つと」

ゆかり：ライフ2200↓3000

「さらにライフダンサーを守備表示で召喚。ターン終了」

ライフダンサー：恋愛

攻撃力：1100

守備力：1700 ↓ 2000

攻撃はしない。多分湊君は私が攻撃を仕掛けた瞬間畏を発動させる。それは確実。

そして私はそれを警戒してると考えている……はず。もしそう考えたなら、攻撃を仕掛けてくる……はず。

なんとも語尾に力強さが無いが仕方ない。なにせあの湊君に心理戦を挑んでいるのだ。手探りもいいところ。むしろ上手く行き過ぎている位なのだ。

『ドロー！……場のモンスター二体を生贄に捧げ、ロキを召喚！』

ロキ：愚者

攻撃力：2600

守備力：2000

『ロキ、クイーンメイブに攻撃！』

—— ほら、きたっ！

ちよつと湊君が私の予想通りの行動に出て嬉しくなる。いつつもやられてばかりだからね。ここでさっきは使わなかった、裏返して場に置いていたカードの使用を宣言。

「リバースカードオープン、魔法カード発動！」

「な！？」

「永続魔法カードタルンダ！ 攻撃モンスターの攻撃力を半分に下げる」

「くっ……」

ロキ：愚者

攻撃力：2600 ↓ 1300

守備力：2000

「その結果クイーンメイブの守備力がロキの攻撃力を上回り、プレイヤーに800のダメージ！」

「ぐああ！」

湊：ライフ4000 ↓ 3200

そうよ、湊君。その表情。どうやら湊君はなんでさっきはタルンダを使わなかったか理解したみたいね。

でも明らかかな焦り、悔しさが伺える。やっぱりさすがの湊君でも予想外だった？

さっき使わなかったのは、あの状況じゃ湊君にダメージを与えなかったから。使ったら私へのダメージは確かに減らせたけど湊君には届かない。でも、まだ終わりではない。

『ゆかり、まさかそのカード……』

「そう、さっきのデュエルの後に貰ったの。私のデッキに使えるそうだったからね」

『……ターンエンド』

分かる。今、湊君はわざと落ち着かせて言った。心は間違いなく騒いでいる。

「私のターン、ドロー！」

—— よし。

「場の二体のモンスターを生贄に捧げ、ラヴァーズを召喚……」

ラヴァーズ：恋愛

攻撃力：2200

守備力：2900 ↓ 3200

「守備表示にしてターン終了」

湊君にとって守備表示って事がよっぽど予想外だったみたい。まさかって表情で私を見ている。貴重だな。滅多に見る事の出来ない表情。写真にとっておきたいくらいだよ。

―― …… ダメ。やっぱダメ。

湊君みたいにクールなボーカルフエイスは決められない。湊君にはばれちゃったかもしれないけど……とにかくここまで上手くもってこれた事が嬉しい。コンボ構築まで3 / 4 完成した。さて、ここで湊君に言わなくちゃいけない事がある。

「このラヴァーズには特殊能力があつてね。法王の間がフィールドとなっているとき、湊くんのモンスターはラヴァーズにしか攻撃できない」

『……！！』

法王の間による守備力アップ。そしてラヴァーズの特殊能力により湊君はラヴァーズ以外に攻撃が出来ない。

「さ、湊くんのターンだよ」

『……ドロー。ペイルライダーを攻撃表示で召喚、ロキを守備表示にしてターン終了』

ペイルライダー：死神

攻撃力：1800

守備力：0

そして私のターン。

「ドロー」

――揃った。

「湊くんは、この状況をどう思ってるかな？ 互いに攻撃できず、しばらく膠着するって感じ？」

『…………』

「でもね、このカードがそれを変える。……嫉妬のクビド、召喚！ 攻撃表示！」

嫉妬のクビド：恋愛

攻撃力：700

守備力：300 ↓ 300

出てきたのは一見したところ、なんて特徴の無いシャドウ。でもさすが湊君。違いにすぐ気が付いた。

『ん、守備力が変化しない？』

「そう、嫉妬のクビドは攻撃力や守備力を変化させる魔法の影響は受けない。そして、この子の最大の特殊能力は」

そう、これで私のコンボは完成。守って……攻めるの。

「攻撃表示でいる限り、攻撃力に等しいダメージを与えること」
『なっ…………ぐあっ！』

嫉妬のクビドから放たれた弓矢が、湊君に突き刺さる。

湊：ライフ3200 ↓ 2500

『……そういうことか』

フィールド魔法、法王の間がアルカナ恋愛のペルソナやシャドウの守備力を300上昇させる。

永続魔法タルンダが攻撃モンスターの攻撃力を半分に下げる。

ラヴァーズが守備力の低い嫉妬のクビドを守る。

嫉妬のクビドがプレイヤーに直接ダメージを与える。

これが私のコンボ。ラヴァーズをやっつけないと、あと四ターンだよ、湊君。

「エンドだよ。どうする、湊くん？」

もちろん安心は出来ない。でも、完成したこれを破るのはそんなに簡単なじゃないはず。やっと完成させたからか、私ってば精神的にも余裕が出てきたかも？

『ドロー！』

湊君はすごい気合を入れてカード引いたのだが、なぜかそのカードを見たまましばらく硬直する。

注意深く湊君を見ると、彼の特徴の一つである、吸い込まれるような深藍の瞳は何かを考えている時のそれになっていた。やがて少しだけ目を見開く。つまりなにか考えが繋がった証拠。

不安。

ホントについさっき『精神的にも余裕が出てきたかも』なんて思っておきながら、数分後にはもうこれだ。我ながら揺さぶりには悲し

い程トコトン弱い。彼はなーんにもしてないのに、ただ彼の瞳の移り変わりだけで不安になっている。なんなんだろ、私。

『モンスターを一体、守備表示で召喚！』

湊君はさっき引いたカードを場に出すと、すぐさまカードは立体に映像化された。私はさっきまで感じていた不安も忘れ、その映像を見つめる。

視線の先には髪が肩口まである女の子が一人。ピンクのカーディガン。首にはハートを象った白いチョーカーなんてなかなか趣味が良い。スカートの短さなんてホント……

「ってなんで私なの！？」

『入ってたんだもん、僕の貰ったカードの中に』

おどけた調子で話す湊君。そう、そのカードの名前は岳羽ゆかり。つまり私。いつもの制服姿で、弓を構える私の姿がそこにあった。

岳羽ゆかり：恋愛

攻撃力：1700

守備力：1700 ↓ 2000

『彼女の特殊能力は、場に出たとき召喚したプレイヤーのライフを500回復させること。僕のライフは500回復する』

湊：ライフ2500 ↓ 3000

「なんか納得いかないな、私のくせに私の敵になるなんて」
『そして永続魔法カード、コスチュームチェンジ!』

―― コスチューム……チェンジ?

―― どう鼻屑目に考えても嫌な予感以外しなただけど!?

「……不穏な名前の魔法だけど、何も起きない?」

『そう、僕のターンにはね。これでターン終了』

「……私ね。ドロー、そして嫉妬のクビドの効果発動!」
『くっ……』

湊：ライフ3000↓2300

「さらに……ってやつぱり!」

ありえない! てかアリエナイ!!

嫉妬のクビドの効果が発動すると同時に、湊君の場では先ほどの魔法が発動していた。嫌な予感以外しなかったあの魔法、コスチュームチェンジ。その魔法の発動と共に、フィールド上のバーチャル私は……メイド服姿になっていた。

メイドゆかり：恋愛

攻撃力：1000

守備力：1600↓1900

「バカじゃないの？　ってかバカじゃないの！？　マジありえないんだけどー！」

文化祭の時の、あの悪夢としか言えない記憶が蘇る。ことメイド服に関しては、仮に楽しい思い出が1%あったとしても、ヤな事が99%を占めていたらそれは悪夢以外何物でもない。

『そういわれても、作ったの僕じゃないし』
「使ってるのはあなたでしょう！」

出たよ、湊君の超屁理屈。何をいけしゃあしゃあと言ってるんだ！でも、湊君は私の問い詰めをいつも通りにさらりと流すと、とても楽しそうにコスチュームチェンジについての説明をし始めた。

『コスチュームチェンジの効果は、使用してから3ターンの間、相手のターンの開始時に発動する。つまりあと二回変身を残してるってこと』

「ウソでしょ……何を着させられるのよ私は！？」

『さあ、なんでしょう？』

「こ、このオトコは……」

『それより、ゆかり』

「何よ」

『やっぱメイド服似合ってるよ。とってもかわいい』

「んなつー！」

ダメだ。これが湊君の作戦だって頭では分かっているのに、心が反応してしまふ。自分でも分かる。

今、私の顔は真っ赤だ。

だいたいズルイっ！

何？『とつてもかわいい』とか。そんなの言われて気にならない訳ない。

そもそも！ 湊君が誰にだってそんな事を無責任に軽く言うから……

……って、ダメダメっ！ すっかり湊君のペースじゃない。

落ち着け、私。まだ破られた訳じゃないんだ。これは私の動揺を誘った湊君の精神攻撃。

破られた訳じゃない。負けた訳じゃない。

冷静になるんだ。弓道部は伊達じゃない！！

心の中で深呼吸する。

集中しろ。雑音を消せ。心の中で数を数える。呼吸を整える。意識を……丹田に集中する。

そうして心を落ち着かせる。

『さ、ゆかりのターンでしょ』

「……エンド」

『僕のターン、ドロー……ターン終了』

湊君のターン終了宣言とともに、嫉妬のクビドが放つ矢は確実に湊君を打つ。

『がは……』

湊：ライフ2300↓1600

だけどこの後が問題。嫉妬のクビドが矢を放つと、悪夢コスチュームチェンジ。その姿を見た瞬間、私の落ち着かせたハズの心は、今や沸騰したやかんの様にピーピー騒ぎまくっていた。

今度の衣装は、ハイレグアーマーだった。

ハイレグゆかり：恋愛

攻撃力：1600

守備力：1800 ↓ 2100

「ッ！？ な、なんてカッコさんのよ、変態！ スケベ！」

『仕方ないじゃない、それに、その……』

さっきのメイド服はある意味は恥ずかしいで済むが今度のは違う。

露出が多すぎる。そもそも何コレ？ つか、誰が考えたの？

要所所しか隠していない赤い布。一番隠している面積が多いのは足という意味のなさ。水着みたいなもんといえばそうかもしれないけど、ここは海やプールじゃない。

完全に露出した肩、半分近く見えちゃってる胸。おなか部分は丸く切り取られおへそが丸見え。下なんて……おしりのほとんどが見えてしまっている。前に至っては恥ずかしくて口に出せない。正にハイレグ。サイテーだ。

「な、何見てんのよ！」

湊君はハイレグアーマーを装着した私を見ていたが、一瞬顔に赤みが帯びるや視線を逸らす。どこ見て赤くなってるんのよっ！見られるのは……イヤじゃないけど、やっぱり見られるのは嫌だ。

さっきまで目を逸らしていた湊君は、なにやら気合を入れ直してもう一度バーチャル私は見ている！
しかも！

「な、ななな何赤くなってるんのよ！」

自分と寸分の違いもない、バーチャルハイレグアーマーな私を見て
湊君はさっきと比較になんない程赤くなっている。

—— ドコを見たっ！ キミはドコ見て真っ赤になってんだっ！

私は恥ずかしくて思わず自分の胸や腰辺りを隠す。無駄だとわかり
つつも隠さずにられない。

『ゆ、ゆかりのターンだよ』

『わ、わかってるよ。一枚カードを伏せて、終了』

『ドロー……カードを一枚伏せ、ターン終了』

湊：ライフ1600 ↓ 900

ターン終了宣言とともに、湊目掛けて弓矢が飛んでくる。湊君のラ
イフはすでに三桁、もう後がない。

……のだが、最後のコスチュームチェンジが行われる。

「……！！え、や、あう……」

バスタオルゆかり：恋愛

攻撃力：2500

守備力：1200 ↓ 1500

目の前にいる自分を見て、最早言葉を紡ぐことができない。バスタ

オル姿の自分。

奇しくも周りの景色は七夕のラブホテル、法王の間。布地が隠している面積はハイレグアーマーよりも多いのだが、薄い布一枚は私のボディラインを包み隠さず映しだす。さっきとは逆にバスタオルの裾からはふとももが何にも隠されず曝け出されていた。

アリエナイ。

『ゆかり……七夕の満月の作戦、思い出すね』

一瞬七夕と聞いてビクン、と身を震わせる。しかし湊君は構わず言葉が続ける。

『あのときは本物だったけど、凄い魅力的だったよ』

「そ、そんなこと今言わなくなつて……」

さりげなく“本物”という単語を強調する湊君。だれがこんな子に育てたんだ。

責任者……つか作者出て来いっ！

『あの時は、もっと間近で見てたけどね』

「やめて！」

思わず耳を塞いでしまう。しかし更に声を張り上げる湊君。一体何責めだ？

『それに、あのときはゆかりが僕を抱きしめながら押し倒して、その上僕の首筋に……』

「やめてっつてばあー!!」

—— そんな事までしてないわっ！ …… たぶん。

「ラヴァーズっ！」

『リバーズカードオープン！カウンター！』

「ッ！！しまっ……」

『遅い』

つい、恥ずかしさのあまり今の状況の元凶へと攻撃命令を出してしまった。そしてまんまと湊君の罠、カウンターに嵌る。カウンターは攻撃してきたモンスターを破壊する罠カード。自分の攻撃を反射されたラヴァーズは、そのまま跡形もなく消滅した。

『ラヴァーズ、撃破』

「ひきょうもの……」

こんなのズルイ！ ズル過ぎる。キッと睨むも、憎たらしいくらい湊君は私の視線をさらっと受け流す。

「嫉妬のクビドを守備表示にして、カードを一枚伏せてエンド」

今の私の場には、守備表示の嫉妬のクビドが一体とリバーズカードが二枚のみ。

『ペイルライダーを召喚』

「……くっ」

ペイルライダー：死神

攻撃力：1800

守備力：0

これで湊君の場にはモンスターが三体だ。

『岳羽ゆかりで、嫉妬のクビドを攻撃！』

湊君の宣言と共にバーチャル私が嫉妬のクビドに突進、片手を振り上げる。パシィイーンと乾いた音が響く。攻撃手段は……平手だった。

『やっぱりか。痛かったもんな……』

失礼な発言をする湊君。素手で2500という攻撃力。失礼極まりない。

問い詰めたい。このゲームを作った人を一晩かけてとことん問い詰めたい。その上で文句を言いたい。

「う、うるさい！ リバースカードオープン！」

ここで取って置ききの秘密兵器を出してしまう事を決心した。戦略的にも、精神的にも頃合。つか限界。

秘密兵器その一。戦略なんてフツ飛ばしちゃう、ある意味極悪な私の最強戦術。

「メギドラオン！」

『な、何！？』

メギドラオン。

場にいる全てのモンスター、そして両プレイヤーの全ての手札を破壊するカード。残されるのは、場に伏せられたカードのみ。加えて、お互いのライフが500ずつ削られる

湊：ライフ400

ゆかり：ライフ2200

『ってかなんでゆかりのデッキにそんなものが……』

「FESの私は一味違うの」

『彼に会いたい、会いたい会いたいの！理屈なんてないの！………だっけ？』

「……！？ う、うるうるさーい！！」

—— 言うなああああああ——！！

思い出すだけでもうだめだ。急に自分のしたことが恥ずかしくなってきた。なんであんな事言っちゃったんだろう。いや、なんて言えただんだろう。

突如ふつふつと湧き上がる感情。

なーんかハラ立ってきた。八つ当たりとも逆切れとも言えるかもしれないが、怒りのベクトルは別方向へと進み始める。

—— 真剣だからハラ立つんだよね。うん。

『エンドだ』

「ドロー。ねえ、湊くん」

「さっき私の手札に一枚カードがあっただでしょ？」

『……ああ』

「そのカードはイシス。私のデッキに入っている唯一の攻撃型モンスター」

そつとりバースカードに手を伸ばす。秘密兵器その二。

「そして唯一のリバースカード、サマリカーム！ 墓地からモンスター一体を復活させる！」

『ま、マジですか……』

メギドラオンで状況をリセット、一ターンで上級モンスターを召喚。これが私の秘密兵器。先のコンボが破られたときの奥の手。正真正銘最後の手。

イシス：恋愛

攻撃力：2500 ↓ 3300

守備力：2200 ↓ 2500

『攻撃力が……』

「そう、イシスの攻撃力は墓地にいるアルカナ恋愛のモンスター一体につき200ポイント上昇する。クイーンメイプ、ライフダンサー、嫉妬のクビド……あと私」

当然湊君の墓地にいる私こと、岳羽ゆかりもカウントの対象。ちなみにラヴァーズが数えられていないのは、ゲームから取り除かれて

いるから。

そして……ゲームとは全く関係ないが、でも大事な事。湊君に確認しなければならぬ事が一つ。

今、こめかみのところがヒクってしたのが自分で分かった。なんかこう……イライラが募る。

「ところで、湊くん」

『……何?』

「さっきさ、美鶴先輩が『湊っ!』って下の名前で呼んでたじゃん。いつの間に?」

『わりと最近かな。美鶴さんがそうしたい、って言うから』
「……そう」

不平だ。不満だ。不服だ。納得行かない。理屈じゃない。なんか面白くない。

「なんかさー、キミってそうだよな。天然たらしっていうか」

だが、湊君はあきらかに不服そうな顔をしている。まるで『僕はそんな事はない』って顔だ。

分かってない。分かってないわ。

「昨日は結子と帰ってたし、一昨日は生徒会の会計の子と帰ってたし、一昨昨日は美鶴先輩……」

『あれは、たまたま一緒になっただけで……』

「そのわりには楽しそうだったよね。相手の子も湊くんも。そんなオンナの敵には制裁が必要だよな」

まったく。何でこんな男好きになっちゃったんだろう。いや、何で

好きになったかは分かってんだけどね。

「せっかく待つてるのにさ……」

私は湊君には届かないようぼそつと呟いた。

『え?』

「なんでもない。イシス、プレイヤーへの直接攻撃!」

『くっ……リバーズカードオープン、トラフリー!』

湊君が使ったトラフリーは本来戦闘から脱する事が出来るスキル。でもこのゲームでは一ターンだけ相手の攻撃によるダメージを防ぐ魔法カード。その場しのぎの感は否めないけど、まあいい。次で決めたらしい。裏返しているカードもとおりあえず危険じゃなさそうだしね。

「残念。このターンで決めれるかと思ったんだけどな。エンドだよ」

多少の余裕が戻ってきただろう私の表情から何かを察したのか、湊君は再び念を込めるかのように指先に力を入れてカードを引く。目を見る限り湊君に余裕はない。

『ドロー!……サキュバスを召喚、守備表示。ターン終了』

「また悪趣味なペルソナを……」

場に出てきたのは小悪魔風な女性型ペルソナ。黒いレオタードみたいな衣装。背中には黒い一對の羽。そう言えば一時期良く使ってたな。

サキュバス：悪魔
攻撃力：1700
守備力：1400

「ドロー」

モンスターカードを引いたら即終了。

だったんだけど、どうやら運命の女神はまだ湊君を完全に見放してはいなかったみたいだ。

つか、もうなにが出てても湊君が女たらしにしか見えなくなってきた。

「うーん、チャンスだったんだけどな。けど保険にはなるよね。永続魔法カード、大天使の加護！」

『また後日談か……』

半ば呆れるように呟く湊君。

「この効果はね、アルカナ恋愛のモンスターは攻撃を回避できるよになるんだ」

大天使の加護。

攻撃指令を出すたびに効果が発動、私の目の前に五枚のカードが現れる。そしてタルタロスでの戦闘後のシャッフルタイムのように目で追って、一枚だけ入っている当たりを引けば、相手モンスターの攻撃が無効化される。成功率は五割位。さっきの真田先輩戦でも大活躍だったカードだ。

「イシス、行って！」

イシスの攻撃によりサキュバスは跡形もなく破壊される。再び湊君の場が空になった。

「ターン終了」

大天使の加護を備えた事は湊君にとっては逆転への大きな壁になる。苦い表情でカードを引く湊君。だけどカードを引いた瞬間、彼の深藍の瞳に希望の光が灯る。

なにか良いカードを引いた事は容易に推測できた。湊君は目を閉じ、深い思考へと沈んでゆく。それはタルタロスでよく見かけた、彼が戦略を練る時に見せる顔。

思考が終わるまでの束の間の静寂。私も沈黙に付き合い、目を瞑る目の前の彼を眺めていた。

—— ここが最後の勝負……か。

やがて瞑想にも似た思考から覚め瞳を開く湊君。

『モンスターカード、リリムを召喚！』

「また壁モンスター？　そうそう凌ぎ続けられるものじゃないよ」
『わかってるさ。だからこそ、この魔法カードが効果を発揮する』

なんであれ、これが最後の勝負だ。湊君が次に何を仕掛けてくるか。彼の整った唇から出てくる言葉を待つ。

『リバーズカードオープン！四身合体！』

四身合体！？

デッキの中に四身合体に必要なモンスター全てが揃っていて、かつその内の一体が場にいるときに発動可能な技。はっきり言って大技だ。この土壇場で良くもまあ揃えたものだ。

『デッキから三枚のモンスターカードを場に出し、融合！ 出でよ、アリス！』

「……！！」

アリス：死神

攻撃力：2500

守備力：0

湊：ライフ2000↓1000

「ふ、ふん。ちょっと焦ったけど、攻撃力はイシスの方が上じゃない」

『うん、それに儀式の代償として僕のライフは半分削られる。でもこいつには特殊能力がある』

ぱつと見たところ小学生ぐらいの女の子。死神、アリスの頭を撫でる湊君。

『アリスが場に出ている限り、対象のモンスター一体は恐怖状態になる。ゆかりなら、気持ちわかんと思うけど』

分からないわよ。だいたいお化けじゃないじゃない。分かるのは…
…湊君が小学生の女の子の頭撫でてる事。

そう言えば神社によく来てた小学生の女の子と仲良かったっけ。結婚してとか言われたんだっけ？

てか、湊君の部屋に泊まって……確かあの子に湊君、抱きつかれてそれで……なんかまたハラ立ってきた。ホント、年齢は関係無しだ。このオトコ。

イシス：恋愛

攻撃力：3300 ↓ 0

守備力：2500

って、ああーっ！

「イシスの攻撃力が！」

『アリスは守備力がゼロのモンスター。その上相手のターンになると強制的に守備表示になるなんて厄介な能力もある。でも、このターンで仕留めれば僕の勝ちだ！』

確かにね。私のライフは2200。アリスでイシスを破壊すれば2500のダメージを受ける。でも、そう上手くはいくとは限らない。私には大天使の加護がある。当てたら勝ち。外したら負け。確率は五割。よくぞあれだけの状況をここまで盛り返したと思う。さすが湊君だ。

『アリス、イシスに攻撃だ！』

「大天使の加護の効果発動！」

私の前に、五枚のカードが現れる。天使の絵柄のカードが一枚、死神の絵柄のカードが四枚。一番左端におかれている、天使のカードが当たりだ。

確認した後、カードは裏向きシャッフルされ始める。徐々にシャッフルされる速度が上がる。でも大丈夫。目で追えている。

『ゆかり、これを当てられなかったら負けだよ』

「……」

やっぱ来た。湊君の揺さぶり。

—— 無視無視……

何かしら揺さぶりをかけてくるのは分かった。でも、ただ目の前でシャッフルされているカードにのみ集中する。カードがシャッフルされる速度は更に早くなっていく。そして最速になった瞬間、湊君は私に声をかけてきた。

『ゆかり……僕が好きなのは、ゆかりだけだよ』

「……!」

—— ちょ！ 今そんな事言う!?

一瞬目を離してしまう。完全にどれかわかんなくなった。たいがいの事は言われても揺らがないよう覚悟していたが、ここでそんなド

真ん中直球を投げ込んでくるとは。
油断した。完全に、油断した。

『さあ、どれを選ぶの?』

シャッフルを終えたカードが私の前で静止する。でも完全に当りのカードは見失っていた。
確率は1/5。

「……左から、二番目」

私の宣言と同時にカードが開かれる。その絵柄は、死神。つまり選択ミス。

アリスの攻撃をイシスは避けきれず消滅した。

『イシス、撃破。僕の勝ちだ』

ゆかり：ライフ2200↓0

「あの、ゆかり?」

—— 負けた……

「……悪かったって」

―― 負けちゃった……

「さっきの言葉、嘘じゃないよ」
「……！！」

湊君の言葉に現実に戻る。気が付けばまわりの景色は見慣れたいつものラウンジ。私はぺたん、と床に座り込んでいた。色んな感情が入り混じる。

口から出たのは思いつき。なぜだか分からないけど深い意味はない。

「……パフェ」

「え？」

「次の日曜日、シャガールでパフェ奢ってくれたら許してあげる」

きつと今の私はわかりやすい顔してる。恥ずかしくて湊君の顔をまともに見れない。

悔しい。あそこまで追い詰めておきながら負けちゃうなんて。

恥ずかしい。もうそれは色々と。

でも、嬉しい。

「わかったよ。次の日曜日ね」

―― まあこれでいいか。

勝ちたかったけど、まあいいや。今度の日曜日の約束も取り付けたしね。試合に負けて勝負に勝った……のかな？
当然パフェだけで終わりって事はないでしょ。

陸章く責任者……つか作者出て来いっ！く岳羽 ゆかり（後書き）

この番外編は別の視点でも書かれています。

○死神の破片version - 作：ぬじまき氏

<http://ncode.syosetu.com/n3110j/6/>

漆章く続・やべえもん見ちまつたく荒垣 真次郎

さて、誤解されがちだが彼は良い人である。

周りに細やかな気を使う、実に面倒見の良い性格をしている。

料理の腕も寮内一なのは当然として、恐らく月光館学園全体でもトップクラスだろう。

動物好きな面も忘れてはいけない。

彼は周りに誰もいない時は『コロちゃん』と呼んでいる事を。もともと本人だけが周りにばれていないと思っているようだが。

そして、少し想像してみて欲しい。特別課外活動部、初期メンバーだった頃の彼の苦勞を。

桐条美鶴、真田明彦という、学年トップクラスの頭脳を持ちながらも、日本トップクラスの天然を持ち合わせている愛すべき残念な二人とメンバーだった頃の荒垣の苦勞を。

「ふう、どつと疲れたぜ……」

あの後天田を落ち着けるために、かなり時間がかかった。作戦室に戻ると、既に準決勝が始まっていて、それを天田を除く敗退したメンバーが見ている。

「おう、シンジか。こいつは旨いな」

「デメエに言われてもな……とりあえず肉が入ってるだけで旨いつていいやがるだろ」

「いや、味は確かだぞ。衣で豚肉を揚げるという考えも斬新であるし、それをパンに挟むというのもエクセレントだ」

「桐条、別に俺が考えたわけじゃねえからな」

「解析の結果、油分がかなり含まれていますね。溶解すれば私のメンテナンスに使えるでしょうか」

「……それは油つつつても食用油だから無理だ」

先ほど差し入れたサンドイッチをつまむ真田と美鶴、そしてそれを眺めるアイギス。一応全員に配ったのだが、試合時間が近かった湊とゆかりはこの試合が終わってからにすると断っていたので食べていない。

——終わったら渡しにいつてやるか。

配布を任せた風花は一番最初に食べていたし、順平はがつついてもその数十秒で皿を空にしていた。
なので、湊とゆかりの二人だけで問題ない。

——山岸は……とりあえずいつも通りか

先ほど垣間見えた閻魔大王も真つ青の黒いオーラは、沈静化している。一過性のものではあったと荒垣は無理矢理信じ込み、その記憶を封印する。

「……伊織と岳羽が有利か？」

「ああ、伊織のデッキはかなり速い。今は山岸がなんとか凌いで体勢を整えてるといった感じだな。岳羽は守備網が既に形成されている。相手が彼でなければ、かなり勝利が近いというあたりだが……」

荒垣の問いに、不敵な笑みでもって答える美鶴。自分を退けた湊が、そう簡単にやられるわけがないという自信だろうか。

『バカじゃないの？　ってかバカじゃないの！？　マジありえないんだけど！』

『そついわれても、作ったの僕じゃないし』
『使ってるのはあなたでしょう！』

そのとき、急に口喧嘩のような声がモニターから聞こえてきた。見ると湊とゆかりのフィールド上に、二人に挟まれる形でメイド服姿のゆかりがいる。

——何やってんだ、こいつら……。

冷めた目でその光景を見つめる荒垣。

「メイド服か？　なかなか似合うではないか。今度うちの使用人として働いてもらおうか……んなつ！？」

「ん？　どうした美鶴。何かあったのか？」

「い、いや、なんでも、なんでもない。気にしないでくれ」

突然明らかな動揺を見せた美鶴。真田は何が何だかわかっていなか

ったが、荒垣には一目瞭然だった。原因はまたしても、画面の中の風花だ。先ほどに勝るとも劣らない淀んだ空気が、彼女の周りを支配している。

——だ、だからなんだってんだ！　って、どう考えても……。

さつきは考えることを放棄して逃げていたが、さすがに現実として捉えざるを得ない。前の試合での幻聴と信じたい台詞を考えると、明らかに原因は湊だ。そして今回は前回以上に、風花の怒りが積みみされている。

どうやら湊は、ゆかりに精神的な揺さぶりをかけるためにセクハラ紛いの言葉責めをしているようだが、湊の一挙手一投足ごとに、風花の顔に青筋が浮かんでいく。

——あ、有里！　頼むから辞めてくれ。

本人たちはゆかりを含め楽しんでいるように見えるが、風花の現状が見えるこちらとしては気が気ではない。だがその願いは叶う事なく、むしろエスカレートしている。

『ゆかり……僕が好きなのは、ゆかりだけだよ』
『……！』

そして、止めに核爆弾が投下された。もうこれだけならご馳走様、どうか外でいちゃついてこいという感じだが、この状況では火に油なんて生易しいものではない。

『……この屑が。勝つために告白するなんざ、乙女心をなんだと思
ってやがる』

『へぶおっ!?!?』

信じ難い言葉が耳に入ってしまった美鶴と荒垣は思わず身を震わせ
る。荒垣ですらいつのまにか恐怖が顔に張り付いていた。目の当た
りにし、しかも怒りを乗せた攻撃を受けている順平には、同情せず
にはいられない。というか、その矛先が自分に向かないことだけを
願わずにはいられない。

「……ようやく、終わったか」

順平と風花の試合が終わるのも時間の問題といった感じだが、先に
決着がついたのは湊とゆかりの方だった。

——あっちが終わらねえうちにさっさと……。

そんな打算をしつつ、荒垣はサンドイッチの入ったバスケットを掴
んで、二人がいるはずのラウンジへと向かった。

漆章ゝ続・やべえもん見ちまつたゝ荒垣 真次郎（後書き）

この番外編は別の視点でも書かれています。

○死神の破片version - 作：ぬじまき氏

<http://ncode.syosetu.com/n3110j/7/>

捌章　つか、罰ゲームしかないじゃん　有里　湊

「お前ら連戦だったから、食ってねえだろ。」

ゆかりとのゲームが終わり、いつものラウンジに戻ってきた僕らを出迎えてくれたのは、片手にバスケットを抱え、サンドイッチを取り出してテーブルに置ける荒垣先輩だった。

「わ、ありがとうございます」

「美味しそう……」

さっきまでの緊張もあつてか、凄くおなかが空いていた所にサンドイッチ。しかも荒垣先輩製。美味しくない訳がない。僕たちは早速遠慮なくいただく。お皿いっぱいあったサンドイッチは、みるみる間に無くなった。

「ごちそうさま、美味しかったです」

「おう……」

——さて、次は決勝戦か……　つて、ん？　な、なんだ！？

両手を上げ、伸びをしていた所に急に感じた尋常ではない悪寒。北極に放り込まれたかのように、僕の心臓は凍りついた。タルタロスでも、満月の作戦でもここまでのモノは感じたことがない。僕は恐る恐るその発生源と思われる方向を振り向く。

「湊くん、次の相手は私だよ」

その先には、風花が居た。

「そうだ。せっかくだし決勝戦を盛り上げるため、ちょっとした賭をしませんか？」

「賭……？」

ぱちんつ、と両手を顔の前で合わせ、無邪気な笑顔で話す風花。

「はい。別に大したモノじゃないんですが……」

「いいけど……何を賭けるの？」

そう。賭けるのは別に構わない。問題は賭の内容だ。まさか風花が僕にハイレグアーマーを着るなんて言わないだろう……

「はい。私が負けたら一週間、湊くんにお弁当作っちゃいます。ご褒美です。でも……負けたら一週間、新作の試食をしてもらいます。味の保証はありません」

戦慄。

その場にいるほぼ全員が凍てついた。絶対零度とはこれかと思える程の威力。

氷結ブースター＋氷結ハイブースター＋コンセントレイト＋ニブル

ヘイムですら可愛く思える程だ。

——…つか、罰ゲームしかないじゃん。僕死ぬじゃん。

その恐怖を僕は知っている。努力してもなお、現世から旅立つほどの威力を誇る彼女の手柄料理。その彼女がリミッターを解放したら…
…考えるだけでもおそろしい。

「いいじゃないか。勝ったら昼飯、負けてもご飯食べるだけだろ？」

—— ちよつ、お前黙ってる！

最初に沈黙を破ったのは階段から降りてきた、味覚音痴、いや肉とその他くらいしかカテゴリーがない真田先輩だった。

「ふ、風花、それはちよつと……」

遠慮がちに言うゆかり。さっきは悪かったと心から思っている。だから…… もっと言うて。ただしもっと力強く。

「そ、そつだぞ山岸。さすがに寮内で、警察沙汰は……な」

あなたらしくないですよ、美鶴さん。いつものようにズバツと切れ味良く言い切ってください。

「警察？ 何言ってるんですか、桐条先輩……」

すうつと目を細める風花。同時に瞳のハイライトが亡くなってゆく。

「だって、ご飯作るだけじゃないですか……」

—— こ、怖ええええええええええー

ゆかりは顔が引きつった。

美鶴さんはどん引きした。

真田先輩は笑っている。

順平は相変わらず灰になっていた。

荒垣先輩は固まっている。

天田とコロマルはガタガタと震えていた。

アイギスは意味がわかっていない。

「そ、そ、そうだな。ははははは」

美鶴さんが後ずさりながら返事する。もはやこれまで。

こうなったら最後に頼れるのは自分だけだ。覚悟するんだ、僕。

「わかった。じゃあこうしよう。僕が勝ったら賭は無し。負けたら……」

負けたら……なんだ。僕はなんて言う気だ。だめだ。そんなの言えない……そんなの自分で死ねって言ってるのと同じじゃないか。さつきした覚悟は音もなく崩れて行く。

「負けたら試食……ね」

しかし風花はそんなあやふやな、濁した状態なんて認めない。だめ押し。いや、念押しか。逃がさないわよという意味表示。この女、マジだ。

——こうなったら勝つしかない。そうだ。勝てばいいんだ。

この賭、一見僕が勝つても釣り合わないと思う人がいるかもしれないが、それはちがう。不幸はいつも理不尽に襲い掛かってくるもんだ。これは未来という名の光か、地獄という名の闇がかかった賭け。勝利は即ち、未来を手にするのだ。

「じゃあ賭成立ですねっ」

笑顔の風花。しかしその瞳にはもはやハイライトは無く、その身に纏うは闇よりもなお黒いオーラ。

明らかにおかしい賭だが、こう落ち着く事は予想済みだったのだろう。

「み、湊君……」

心配そうなゆかりの声。だが僕はそれに答えず、邪気を放つ風花を真っ直ぐと睨み返す。

—— わかった。受けて立つよ、風花。

男には、負けられない戦いがある。

僕の全てを賭けて……奪われかけた未来を取り戻すために。
僕はキミを倒す！

絶対に負けられない戦いが、ここにもあった。

捌章　つか、罰ゲームしかないじゃん　有里　湊（後書き）

この番外編は別の視点でも書かれています。

○死神の破片 version - 作：ぬじまき氏

<http://ncode.syosetu.com/n3110j/8/>

玖章　私登場　アイギス

皆さんおはようございました。アイギスであります。

僭越ながら決勝戦の実況をさせていただく事と相成りました。宜しくお願いするであります。なお、この試合の様子はアイギス・アイにてデジタルハイビジョン録画しております。それでは試合前に簡単に今までの戦いを振り返ってみましょう。

一回戦

有里　湊VS桐条　美鶴

あと一步というところまで湊さんを追い詰めた美鶴さんでしたが、湊さんのまさかの奇策が炸裂。なんと美鶴さんのカードが底をつき、勝負が決しました。神機妙算であります。

天田　乾VS山岸　風花

戦略対戦略。とても見ごたえのある序盤から中盤だったのですが、突如天田さんが怯えるように調子を崩し、一気に風花さん優勢のまま勝負は決しました。萎縮震慄であります。

岳羽　ゆかりVS真田　明彦

ゆかりさんの一方的な試合でした。真田さんの敗因は戦略「攻撃の一边倒と分析が完了しています。攻撃馬鹿であります」。

伊織　順平VSアイギス

納得行きません。再戦を要求します。よもや順平さんに負ける項目がこの世に存在するとは。鳥白馬角であります。

二回戦

有里 湊VS岳羽 ゆかり

またもや湊さんはピンチの連続でありました。戦略的にはゆかりさんが完全に勝っていたであります。湊さんの甘いささやき声に負けました。心の隙を狙う男、有里 湊でありました。意馬心猿であります。

伊織 順平VS山岸 風花

またもや戦略VS戦略の良い試合でしたが、中盤、突如風花さんの畳み掛けるような、真綿で首を絞めるような、逃げ道を一つずつ消し去るような攻撃に順平さんはハイに……いや、灰になったであります。残息奄奄であります。

そして残った強者による巖戸台分寮最強決定戦決勝戦。まずはこの方から。

走り出したペンは止まらない。

小学生から教師まで何でも来い。

恐怖の弁当だってバッチこい。

わたしの一番の大切はあなたの傍にいます！

湛然無極、有里 湊さん。

相対するは最強ナビゲーター。

私に話し掛けるには要勇気MAX。

最強癒し系ボイスの持ち主。

ハッキングと料理の腕前パラメータの振り分けをミスったか？

迦陵頻伽、山岸 風花さんであります。

「ちょっとアイギス？」

「なんでありますか、ゆかりさん？」

「ちよいちよいツツコミどころがあるんだけど……」

「ゆかりさん、ご機嫌でありますね。何かいい事あったんですか？」

「ちよ、なっ!？」

「口調とにやけた表情が一致していません」

「べ、別ににやけてなんかっ!」

「あ、始まるであります」

『「決闘!」』

いよいよ決勝戦が始まりました。湊さんの顔色がなにやら優れない様子。心配であります。一方風花さんは余裕の表情。笑顔であります。

『僕から……。カードを二枚伏せてリリムを召喚、守備表示。ターン終了』

リリム：悪魔

攻撃力：1500

守備力：1500

「私ね。ドロ……まずはカードを一枚伏せて、ユニコーンを守備

表示で召喚」

ユニコーン：女教皇

攻撃力：600

守備力：1800

「そして魔法カード、夏紀の危機。ハイ・アナライズ、エスケープロード、サードアイの三枚をデッキの一番上に置く」

最初に動いたのは風花さん。

私のデータでは“夏紀”とは風花さんのクラスメイトとあります。“ハイ・アナライズ、エスケープロード、サードアイの三枚”とあるところから、完成までに三ターン必要とする、と推測します。完全に整えられる前に湊さんとしてはなんとかしたい所であります。

「エンドだよ」

『ドロー……インキュバスを召喚、守備表示。ターン終了』

インキュバス：悪魔

攻撃力：1400

守備力：1700

インキュバスの攻撃力では守備力の高い風花さんのユニコーンには

攻撃はできません。これは次のターンに上級モンスターを召喚する布石。

「ドロー、永続魔法サードアイ」

どのような戦略、戦術なのか。さあ、風花さんのターンであります。

「このカードが場に出ている限り、湊くんの伏せカードは公開される」

『……そういうことか』

伏せ1：トラフリー

種類：罠

効果：このターンモンスターは攻撃することができない。

伏せ2：地返し如玉

種類：魔法

効果：墓地にあるモンスターを一体、場に再生する。

これは……湊さんの伏せカードが表になっていきます。風花さんのアナライズ……でありますか。

このゲームは駆け引きと情報戦。それなのに伏せているカードが丸見えとは。湊さんにとって相当厳しい戦いになりそうです。

「さらにハイピクシーを守備表示で召喚、ターン終了」

ハイピクシー：女教皇

攻撃力：600

守備力：1900

守備力の高いモンスターが二体。風花さんは陣が整う為の壁として召喚したと推測します。通常ならここで湊さんは攻撃を行うのが定石であります。

『場のモンスター二体を生贄に捧げ、ルシファー召喚！』

ルシファー：星

攻撃力：3000

守備力：2500

これは、なかなか攻撃力の高いペルソナを召喚してきました。おそらく湊さんのデッキの中でも1、2を争う攻撃力ではないでしょうか。

『ハイピクシーに攻撃！……撃破』

ルシファーとハイピクシー。その様はまるで大人と子供。湊さんの宣言とともに、攻撃を仕掛けたルシファー。風花さんのハイピクシ

ーは跡形も無く破壊されたであります。

しかし……罾の発動がありませんでした。なにかしら罾を仕掛けて
いる可能性が高いと推測していましたが。いえ、そう思わせる事も
作戦でしょうか。風花さん、なかなか策士であります。

『……ターン終了』

「ドロー、永続魔法ハイ・アナライズ。湊くんの場のモンスターは、
攻撃力と守備力それぞれ500ダウン」

ルシファー：星

攻撃力：3000 ↓ 2500

守備力：2500 ↓ 2000

『……弱点もお見通し、ってことか』

「バスタードライブを守備表示で召喚して、ターン終了」

バスタードライブ：戦車

攻撃力：500

守備力：2000

アルカナ戦車でありますか。私と同じであります。しかしなぜ戦車
のアルカナを？

たしか風花さんのアルカナは女教皇のはずであります。順平さんは
魔術師のみ。ゆかりさんは恋愛のみでした。謎であります。

『ドロー……ついでる。ジャックフロストを召喚』

ジャックフロスト：魔術師

攻撃力：1000 ↓ 500

守備力：600 ↓ 100

『デッキからジャックフロストを特殊召喚し、ミックスレイド、ジャックブラザーズ！』

ジャックランタン：魔術師

攻撃力：1100 ↓ 600

守備力：800 ↓ 300

ペルソナ同時複数召喚、ミックスレイドでありますね。湊さんにしかできない必殺技ともいうべき、高度なテクニクであります。

そういえば、私にはなぜミックスレイドが出来なかったのでしょうか？

……忘れるでありますか。了解であります。

では別の話を。ジャック兄弟。私知っています。

こういうキャラは“かわいい”であります。日本の女の子はほとんど全ての表現を“かわいい”の単語で乗り切る事ができるのであります。日本語から“かわいい”を無くすと、とんでもない未曾有の危機になるくらい、“かわいい”という単語に世の女子たちは依存しているであります。

とにかく、“かわいい” ジャック兄弟によるコントで、ユニコー

ンは体勢が崩されました。

『バスタードライブをルシファーで攻撃し破壊。さらにジャック兄弟でプレイヤーへの直接攻撃!』

「ひあっ……」

風花ライフ：4000 ↓ 2900

『ターン終了』

湊さんは攻撃力が極めて低いジャック兄弟を攻撃表示で置いておりますが、トラフリーでカバーと考えているのでしょう。

「ドロー、エスケープロード。互いの場にモンスターが二体以上いるとき、モンスターの数が同数となる」

『……!』

風花さんの二枚目のカード。エスケープロード。先ほど召喚したジャック兄弟が手札に戻されます。

「さらにリバースカードオープン。魔法カード、悩殺!このターン相手のモンスター一体をコントロールする」

『くっ……って、なんで悩殺?』

「私って着やせするタイプらしいですから」

悩殺……?」

データベース検索開始……完了。
結果表示。

のうさつ【悩殺】

大いに悩ますこと。特に、女性がその美しさや性的魅力によって男性を夢中にさせること。

用例：「悩殺的なポーズ」「眼付が男を悩殺する魔力がある」

提供元：大辞林 第二版

つまり風花さんは、風花さんの美しさや性的魅力によって湊さんを夢中にさせた、と。

さらにこのゲームでは風花さんの美しさや性的魅力によってルシフアーさんを夢中にさせた、と。

これは恐ろしい魔法であります。是非ともわたしもスキル：悩殺の習得を希望するであります。このゲームが終わったら早速桐条ラボへ連絡であります。

さて、湊さんの唯一のモンスターであつたルシファーさんは風花さんの美しさや性的魅力によって奪われたであります。さらに風花さんのターンは続きます。

「攻撃しても、どうせトラフリーで無効だよね。だから……この二体を生贄に捧げるよ……そしてスカアハを召喚」

スカアハ：女教皇

攻撃力：2700

守備力：2300

「プレイヤーに攻撃」

『……罾カード発動、トラフリー』
「エンドだよ」

この攻撃を受けては湊さんはひとたまりもありません。イチコロであります。ですが風花さんもトラフリーを発動させる事は推測済みの様子。特に気にしている様子はありません。

ここまでは風花さん優勢でゲームは進行しています。

まずはモンスターの数を減らし一騎打ち。湊さんが上級モンスターを召喚しても、ハイ・アナライズの効果で能力を下げる。サードアイで罾も即座にバレてしまいます。

湊さんの持つている地返しの手でルシファーさんを再生しても、風花さんのスカアハには攻撃力で下回る。当然通常手段で召喚するモンスターは相手にならない。なかなか完成された戦略であります。

『ドロー、ジャックランタンを召喚。守備表示でターン終了』

自動的にジャックフロストも召喚されるのですが、風花さんエスケープロードの効果発動により即座に湊さんの手札へと戻ります。

「ドロー。魔法カード癒しの波動でカードを三枚引いた後、スカアハで攻撃！」

女教皇最強のペルソナ、スカアハは少し笑いながらジャックランタンに向かって一撃。抵抗する手段もなく、ジャックランタンは破壊されました。その様子の風花さんは大変ご満悦な様子。

「ふふふ……。壁が居なくなったら、湊くんの番だよ」

風花さんの笑い。なぜか心底楽しそうであります。対して湊さんは何かに恐怖しているようにも見えます。

わかります。これは “ 引く ” という状態です。最近覚ええました。

「けどそれはもう少し待ってあげるよ。ターン終了」

『……ドロー。ジャックフロストを守備表示。ターン終了』

「ドロー。スカアハ、よろしくね」

スカアハはまたも湊さんのモンスターを木っ端みじんに砕けます。風花さんもスカアハもとてもいい笑顔であります。

なんだか湊さんを見ている風花さんの瞳のハイライトが薄くなっているようにも感じますが気のせいでしょうか？

「湊くん、手札が増えてきたね。そういう人には、こうです！」

『……？うわっ！？』

これは……触手？　これが順平さんの言っていた触手プレイ？

風花さんが一枚のカードをかざすと、湊さんの足場から妙な物体が生えてきたであります。たちまち湊さんの全身を覆い尽くすように絡まりはじめました。どうやら触手の材質は鉄のようであります。さぞやひんやりした感触であると推測します。

「永続魔法カード、改造禁止。毎ターン、手札の枚数×50のライフを吸収する」

『ちよつと、僕は改造なんて……』

「あなたを信じていたのに……改造なんて、私悲しいです」

改造？

俗にいう“ちーと”というものでしょうか。

つて！ 湊さんは改造していたのですかっ！

わたしも更なる強化、今後の戦いに向けて是非とも改造を希望する
であります。

フルアーマーアイギス
パーフェクトアイギス

ミーティアも捨て難い……

ああ魅惑の重武装兵器たち……

憧れの先輩方に私もあやかりたいものであります。

「……ターン終了です」

『僕のターン、ドロー……ぐああ！？』

湊ライフ：4 0 0 0 ↓ 3 7 5 0

風花ライフ：2 9 0 0 ↓ 3 1 5 0

よく見ると湊さんのピンチではありませんか。カードを引くと同時に、湊さんを拘束している触手の締め付けが強くなったようです。
これは……湊さんの身に危険はないのでしょうか？

苦悶に満ちた、とてつもない痛みに耐えているかのような表情であります。

場合によっては乱入も辞さない覚悟であります。

いえ、まさに今がその時！

私、アイギスは湊さんの盾となり、そして矛となりましょう。

さあ、参るであります！

「ちょっと、アイギス」

「なんでありますか、ゆかりさん？」

「乱入なんてしちゃダメ」

「……」

「黙ってもダメ」

「……了解であります」

……止められたであります。残念であります。仕方ありません。実況を続けるであります。

さて、風花さんは相変わらず一点の曇りもない笑顔であります。

「苦しそうだね、湊くん。でも、サレンダーなんて許さないよ……」

風花さんを見て、湊さんは小さく何か呟いているであります。

マイク受信感度MAX。音量MAX。

さっきのつぶやき再生。

「マケラレナイ。マケタラ、シシヨクナンド」

でありますか。シシヨク……とはなんでしょう？

いずれにしろ湊さんのピンチは続きます。

『カードを三枚伏せて、地返しの手発動！ ルシファーを再生する』

ルシファー：星

攻撃力：3000 ↓ 2500

守備力：2500 ↓ 2000

伏せ1：四身合体

種類：魔法

効果：リリム、ナルキッソス、ピクシー、ナタタイシのいずれかが場に出ているとき、ライフ半分と引き換えにアリスを召喚する。

伏せ2：完全神柱

種類：永続罫

効果：相手モンスターが自軍モンスターに攻撃したときに発動。3ターンの間そのモンスターに攻撃したときのみ、攻撃力が半分となる。その後対象の自軍モンスターは破壊される。

伏せ3：コスチュームチェンジ

種類：永続魔法

効果：ペルソナ使用のみに使用可能。キャラクターにあつた装備を3段階で身につける。

『ターン終了』

アリス。

ゆかりさんとのゲームでも登場した、相手の攻撃力を0とすることが出来るペルソナ。確かりリムが既に墓地にいるのであります。あと三枚揃えなくてはいけません、この不利な状況を逆転できる可能性を秘めたペルソナである事は確かであります。

「アリス、ね。あんなちつちな女の子を……」

『え？風花？』

「そういえば、神社で小学生と戯れてるのも見たことあったっけ……」

話しかけてくる風花さんにとて不思議そうな顔をしている湊さん。俯きがちに話していた風花さんが湊さんの顔を見た瞬間、笑顔から豹変しました。

「この変態」

『……』

風花さんの表情が一変したであります。

表情の変化。分析の結果、“怒り”と判別。

声質の変化。センサーは“怒り”を感知。

どうやら風花さんは湊さんに対してお怒りの様子。

なんでしょう。やはりさっきの“ちーと”とやらが関係しているのでしょうか？

それとも「変態」というていた単語と関係があるのかもしれませんが。これは検索であります。

データベース検索開始……完了。
結果表示。

へんたい・せいよく 【変態・性欲】

性的な行為や対象が倒錯しており、異常な形をとって現れるもの。

↓異常性欲

提供元：大辞林 第二版

……つまり、湊さんは性的な行為や対象が倒錯している？

風花さんは美しさや性的魅力によって湊さんを夢中にさせ、湊さんは性的な行為や対象が倒錯していて、異常な形をとって現れている？
なんでありますか、この危機的状况は。

「私のターンだね、ドロ……スカアハでルシファーを攻撃」

「……！？」

まさかつ！

これは完全に予想外の行動であります。どのようなシミュレーションをしても、今の攻撃は理論的に説明不可能であります。ルシファーを攻撃すれば畏によってスカアハが破壊されるのは目に見えているであります。風花さんに伏せカードもない。対抗手段があるとは思えない。なぜでありますか！

『……畏カード発動、完全神柱。スカアハの攻撃力ダウン』

スカアハ：女教皇

攻撃力：2700 ↓ 1350
守備力：2300

攻撃力でルシファーを下回ったスカアハは当然破壊されました。

風花ライフ：3150 ↓ 2000

「痛い……酷いよ、湊くん」

『いや、それは風花が自分で……』

「お仕置きです。アイギスを攻撃表示で召喚」

アイギス：永劫
攻撃力：1700
守備力：1700

やや、私登場。……であります。

「さらに魔法カード、桐条ラボ。アイギスをパワーアップ」

おお。しかも追加装甲であります。フルアーマーアイギスであります。

攻撃力、防御力共に1.6倍以上の強化に成功。これはいい装備であります。かっこいいであります。

ん？……なにやら湊さんが溜息をついております。
唇の動きを解析……『改造してるのそっちじゃん……』であります
か。

アイギス進化型：永劫

攻撃力：2800

守備力：2400

「もうバトルフェイズは終わったから、ターン終了だよ」

これはフルアーマーアイギスに乞うご期待であります。ゆかりさん、
見ているでありますか？

「……なに、アイギス？」

「見てください。私がいるであります。私登場！」

「あなた登場」

「はい！」

「……」

「どうしたでありますか？」

「いや、湊君ピンチだなと思って」

「はい」

「完全神柱使ったからルシファーはあと2ターンで終了。しかも風
花、私と湊君の戦いを見てたぶんアリスの事知っているのよ」

そういつてゆかりさんは湊さんと風花さんのライフを指しました。

『ドロー……ぐっ、あああ』

湊ライフ：3750 ↓ 3650

風花ライフ：2000 ↓ 2100

「アリスの攻撃力は減って2000。風花のライフは湊君のライフを吸収して2100。もうアリスの一撃では勝てないの」
「なるほどな」

つまり風花さんのターンになると無力となるアリスは格好の的です
りますね。

『魔法カード、コスチュームチェンジ！アイギスに装着』

先程、ゆかりさんとの戦いでも使ったカード。今回、このカードは装着したモンスターをコントロールしているプレイヤーとは逆のプレイヤー、つまりこの場合は湊さんのターンで変化するであります。さあ、何に変化するでありますか！

メイドアイギス進化型：永劫

攻撃力：2500

守備力：3000

あれはメイド服っ！

確か、絶対服従を誓う証として まとう事が許されるという服です

ね。わたしに相応しいであります！
攻撃力が下がったのは残念ではありますが、あれはあれでいいであります。

「小学生だけじゃなくて、アイギスにまで……なんて見境のない……」

メイド服を着た私を見て、風花さんは低い声で呟きました。風花さんから怒りと解析不能な感情が検知されました。なんでしょう、この……黒いものは？

『ル、ルシファーでアイギスに攻撃！』

え？

私……撃破？

「ちょっとアイギス？」

「ゆかりさん……私……撃破されたであります。絶対服従を誓った服を着たのに……」

「いや、アイギス……」

「ゆかりさん……後はお願いするであります」

「え、ちよつ！ ええ？ マジで？」

「マジであります……」

はあ……。

知らない内にアイギスまで傷つけて。ホント……

えー、おほん。ここからはしばらく岳羽 ゆかりが実況します。さあ、まずは湊君のターンから。

『さらに凱旋の騎士を攻撃表示で召喚してターン終了』

凱旋の騎士：皇帝

攻撃力：1800 ↓ 1300

守備力：600 ↓ 100

「……ドロー。魔弾の砲座を召喚、凱旋の騎士に攻撃」

魔弾の砲座：戦車

攻撃力：1700

守備力：500

風花のハイ・アナライズが効いているわね。無かつたら相当状況は違うんだけど。凱旋の騎士はあっさりと粉々に碎け散っちゃった。

『ぐっ……』

湊ライフ：3 6 5 0 ↓ 3 3 5 0

「ターン終了」

湊君のライフが、徐々に削られていく。なんとか大幅な減少こそ防いでいるものの、状況の打開には至っていない。しかも、加えて改造禁止の効果もあり、着々とライフポイントの差が縮まっている。これは……本格的にマズイかも。

『ドロー……ぐ、あっ……』

湊ライフ：3 3 5 0 ↓ 3 2 5 0

風花ライフ：2 1 0 0 ↓ 2 2 0 0

やたっ！

ここでカードを引いた湊君の瞳が光った。何かいいカードを引いたみたい。

『魔法カード、ユニバーズ！』

なにこれ！？

ユニバース？　って宇宙？

発動した瞬間、場に出ていたカード、シャドウが一瞬でかき消されてしまった。

『この効果は、場の全てのカードを破壊する。モンスターも、魔法も、罠も、全て』

「……………！！」

それって、私のメギドラオンを軽く超える、リセットカードじゃん。そんな奥の手あったんだ……でもこれで風花のデッキの要、ハイ・アナライズ、エスケープブロード、サードアイが無くなった。状況は一変する。

『そしてラミアを守備表示で召喚、ターン終了』

ラミア：隠者

攻撃力：700

守備力：2000

どうやら湊君は攻撃で風花のライフを削るより、場を整える方を優先したみたいね。私的にはここは攻撃かなあ……とか思ったりもするんだけど、ね。まあ湊君の事だから色々考えがあるんでしよう。風花も手札が二枚あるしね。

「ドロー、カードを一枚伏せて、サラスヴァティを守備表示で召喚。ターン終了」

サラスヴァティ：女教皇

攻撃力：1000

守備力：1800

風花も場を整えようとしてる？

ここからはカードの引きが勝負ね。こんな時の湊君は憎たらしいくらいカードの引き、いいからなあ……

『ドロー』

今度は表情としてはつきり出した。湊君、決定的なカードを引いた。これは一気に勝負を掛けるかも。

『ラミアを生贄に捧げ、メルキセデクを召喚！』

メルキセデク：正義

攻撃力：2300

守備力：1900

『メルキセデクでサラスヴァティを攻撃！』

「……伏せカードオープン、攪乱。サラスヴァティを三体のモンスターに分割する」

サラスヴァティ 1 / 3 : 女教皇

攻撃力 : 330

守備力 : 600

何アレ？　かわいいー。なんかサラスヴァティが三体のミニサイズになった。んー壁モンスターって事ね。うわ……メルキセデクの容赦ないパンチ。チビサラスヴァティの一体を捉え、破壊。なんかイジメみたいな光景ね。

『ターン終了』

湊君、完全に攻める気で一杯ね。ま、確かに状況は一変したし、美鶴先輩戦みたいにデッキが無くなる心配はないもんね。

「ドロー、リングフォートを守備表示で召喚、ターン終了」

リングフォート : 戦車

攻撃力 : 1400

守備力 : 1400

今度出てきたのも、特に特徴のない壁モンスター。当然湊君は攻撃を仕掛ける。

『ドロー……戦術を崩されたデッキは、終わりだ。もうつよ、風花。』

ナタタイシを召喚、攻撃！』

ナタタイシ：戦車

攻撃力：1800

守備力：1200

リングフォートとサラスヴァティが一体ずつ破壊される。残りは二体だ。

『エンド』

「ドロー、叫ぶティアラを召喚。ターン終了」

叫ぶティアラ：女教皇

攻撃力：1100

守備力：1800

『ドロー……完璧だ。サキユバスを召喚』

サキユバス：悪魔

攻撃力：1700

守備力：1400

風花の場にモンスターは二体、湊君の場には三体。一体足りない。
このままじゃ一体は風花への直接攻撃になる。攻撃を邪魔する伏せ
カードもない。これで決まり？

『全軍一斉攻撃！』

メルキセデクが叫ぶティアラを、サキュバスがサラスヴァティをそ
れぞれ破壊。そして余ったナタタイシが、風花へと攻撃を仕掛ける。

「きゃあ!？」

風花ライフ：2200 ↓ 400

『ターン終了。風花、最後のターンだよ』

「……そうだね」

「もちろん私の勝利で、ただだね」

『な、何を。この場面で逆転できるわけ……』

風花の表情に悲壮感はない。余裕すらある。湊君の表情の方がよっぽど余裕がない。風花には……まだ何かある。

「さっき言ってたよね？戦術が崩されたデッキは終わりだ、って。私もそう思う」

でもね、と言って風花はくすりと笑う。

その表情に私はゾクっとした。なにか、禍禍しいものを感じる。同時にわかった。湊君があぶない。このままでは危険。勝負を超えた、身の危険を理屈抜きに理解した。

「気付いてなかった？今私が手札に持っている二枚のカード、デュエルの中盤からずっとそのまんまだって」

『……??』

「私の戦術は、まだ崩れてなんかいない。サポートスキルが消されたときの対策を、私が考えていないとも思った？」

『なっ……！?』

「まずはモンスターカード、山岸風花を召喚！」

山岸風花：女教皇

攻撃力：1000

守備力：1700

「さらに魔法カード、バックアップの裏切り。このカードは、サポートスキルが三枚以上墓地にあって、かつ山岸風花が場に出ているときしか使えないんだ。そして、その効果はね……」

ここで一呼吸おいて、風花は湊君に微笑みかける。その微笑は氷のようだった。

「場の山岸風花以外のモンスターのコントロールをこのターンの間に入れ替えること」

『何だって！？』

「ただし、このターンを凌がれたら、私の負けになっちゃうんだね」

場には湊君のモンスターが三体、一方風花の場には除外される山岸風花のみ。これを入れ替えるということは、すなわち4対0の状況を作り出すということ。

「いい子ね、みんな」

メルキセデクが、ナタタイシが、サキュバスが、風花の下へと駆けつける。

「覚悟はいい？ 湊くん」

このデュエル中で最も輝いた、それでいて最も残虐な笑顔を浮かべて風花は尋ねる。湊君もはもはや、答えることができなかった。

「あ、最後に言っておくけど……私はバックアップだからなんにも装備できないんだけど……私の手って、両手剣の分類に入るんだって」

恐怖に震える湊君に対して、風花はなんでもないように伝える。いつのまにか風花の手首から先が、光沢のある金属になっている。ちよ、そんなのあり！？

『や、やめ……』

「ダ・メ」これは勝負なんだよ、湊くん」

ちよ！ 湊君！ 湊君っ！！

風花、ちよっと待って！

—— だめよ、ゆかりちゃん……

私の頭の中に響く風花の声。え？　なんで？　風花聞こえてるの？
ちよつと、風花！

「メルキセデク、ナタタイシ、サキュバス……そして私で、プレイ
ヤーに攻撃！」

『ぐああああ……！！！！！！』

湊君に一齐に襲い掛かるメルキセデク、ナタタイシ、サキュバス。
悲鳴を上げる事すらもはや叶わず、息も絶え絶えになった湊君を満
足げに見下す風花。

その顔は笑顔。氷のような微笑み。

瞳からハイライトは完全に消え失せ、口角を歪め笑っていた。

鈍く光る両手で湊君の頬をヒタヒタと何度か撫でた後、大きく右手
を振り上げる。

私はそれを止める事もできず、ただ湊君の名前を呼びつづける事し
かできない。

いつのまにか、これがゲームである事をすっかり忘れ、現実の危機
と認識している。

ジャアネと呟く風花。

風花の背後には黒く渦巻くなにかがうねっていた。

玖章〱私登場〱アイギス（後書き）

この番外編は別の視点でも書かれています。

○死神の破片version - 作：ぬじまき氏

<http://ncode.syosetu.com/n3110j/9/>

拾章ゝあら不思議ねゝ黒風花（前書き）

■ご注意。 ちょっとだけヤンデレな風花さんです。 苦手な方、そんな風花さんは見たくないって方は、この章はとばして次の終章へ進んでください。 話は繋がっております。

拾章ゝあら不思議ねゝ黒風花

試合が終つてすぐに調理にかかつているんだけど、途中ですっごいレシビ思いついちやつて急遽変更。

煮物にしちやいました。うん、女の子っぽいよね。

男の子には根強く 肉じゃがなどの煮物を作る子〃料理上手な女の子って “肉じゃが信仰” が残ってるからね。

あれ、意外と簡単なんだよ。でも煮物はアピール度 B A T U
G U N だもんね。

湊君は素直におとなしくイスに座つて、私の料理を待つてます。
待たせちゃつてゴメンね。

「さあ、出来ましたよ、湊君」

出来たてほやほやのスープ。ほわほわと湯気も立つてます。紫の。
香りは……そうだな、ちょっとだけ刺激的……かな。きつとスパイスのせいだと思う。

色は……醤油ベースで煮込んでいるから黒。

その中にお野菜の白と赤と茶色のコントラストが素敵です。

「これは……一体何？」

湊君の不思議そうな表情。

そつですよ、見た事ないはずですよ。だって風花オリジナルですから。

ここは懇切丁寧な説明が必要です。

[illegible]

⋮

無言の湊君。質問もないみたいだし……

うん。どうやら上手く説明は伝わったみたい。

と、ここでゆかりちゃんが私に話し掛けてくる。

「あ、あの、風花？ 何を怒ってるのかわからないけど、これは流石に……」

「いくらゆかりちゃんがつてもダメですよ。これは罰ゲームなんですから。それに、せっかく湊君を想って作ったんですし」

ちよつと……邪魔よね。

「んー、ゆかりちゃん、ちよつと外に出てもらえるかな？」

「えっ？　ちよっ！」

ゆかりちゃんの服を掴んで食堂の裏口へと一緒に行く。
しばらくゆかりちゃんにはこの中にいてもらおうかな。

大丈夫。

終わったら……ちゃんと出してあげるから。

扉は妙に大きな音を立てて閉じてゆく。

あ、背後には湊君の視線を感じた。
一体何を考えているのかしら。気になるよね、普通。
でも大丈夫。私には強い味方がいる。

実は、みんなには言っていないけど私のペルソナ、ルキアには特殊能力があるの。

それはルキアが触れている対象の心の中の声が、私には聞こえる事。
私のおつておき。

—— ふふふ、おいで、ルキア。

「はい、風花様」

—— 湊君の心の中の声、教えてね。

「承知致しました」

私はゆっくりと湊君に近づき、真正面に立つ。

湊君に気づかれないように、そっとルキアは背後に回る。

大丈夫。流石の湊君でも気づかない。

嬉しくて……そんな余裕、ないよね。

そっと湊君に触れる、ルキア。うん。湊君の心の中の声が私に流れてき

た。
それじゃあ始めましょう。

「さ・て。邪魔者はいなくなっただし、じゃあ続きね。これはね、自信・作。どうやって作ったかというだね。まずはお野菜は縦半分に切って……」

「――皮は？ 皮剥いてない！」

うふふ、ちゃんと湊君の心の声が聞こえる。

「で、鍋に出汁と、お塩、それに醤油、ちよっぴりお酒を入れちゃって。てへっ　それで火にかけて、沸騰したら……」

「――てへっ　じゃないっ！ ……包丁光らせてそんな事言っただけで全っ然かわいくない。むしろ怖い！」

「さっきの大根や人参、じゃがいも、お魚を入れるんです」

「――切ってよ！ 大根もじゃがいもも人参ももつと細かく切ってくれ！ 鍋の中でごろごろしてるでしょ！　っていうか切った魚は何で頭と内臓しか入れてないのさ！？　逆でしょ普通！！」

「でも思ったように色が出なかったの、墨汁とかで色彩を整えて……」

「—— ちょっと待て、今『墨汁』とか言わなかった？ もう食材ですらない！」

「ちょっと酸味が弱いんじゃないかと思ったので、クロロ酢酸を入れて……」

「—— ついに薬品に手を出した!？」

「あとじゃがいもがうまくデンプンの甘みが出るように、硫酸で加水分解しました」

「—— なぜ!？ 料理で化学反応とか使わないから！ 頼むから調味料で甘みを出して!！」

「あと、せっかくたくさん作ったので、腐らないように防腐剤の成分の硝酸カリウムを入れておきました。これで、何日間か持ちますね」

「—— 違う！ 腐る腐らないの問題じゃないんだ！ ってかちょっと待て……」

嬉しくせに心の中は素直じゃない。

でも私知ってます。こういうの、ツンデレっていうのよね。

って、あれ？ 湊君、何か深く考え込んでる。どうやらなにか気が付いたみたいね。

「食塩＋クロロ酢酸⇌クロロ酢酸ナトリウム＋塩酸

硝酸カリウム＋硫酸＝硝酸＋硝酸水素カリウム
塩酸＋硝酸＝って王水っ！？」

あら不思議。なんでお料理で王水なんて単語がでるのかな。
ちなみに王水とは、最も安定した物質である金さえも溶かすとしても凄い酸なんです。

つと、ここでルキアには戻ってきてもらおう。
ご苦労様、ルキア。私は説明の続きです。

「で、火が通って味がしみたら完成。きつと舌もとろける美味しさですよ」

期待のあまり表情が強張る湊君。うれしいな、そんなに喜んでもらえるなんて。

「隠し味にちよつと正露丸を入れちゃったりして♪」

さあ、これで説明完了。隠し味に正露丸ってなかなか斬新でしょ？
いままで見たお料理のどの本にも載ってなかったんだから！

「じゃーん。風花特製、人参と大根、じゃがいもの煮物だよっ」

「なあ風花……」

「なあに、湊君？」

「味見……した？」

なんだか湊君、ヘンな事言ってる。
ふふふ、ふふふふふふふふふふ

私は湊君を見つめ、そしてそつと呟く。

「味見って何？ それどこの国のスポーツ？」

あれ、なんか湊君、すごく喜んでる？

あ、そつか。良かったあ、そんなに喜んでくれているんだ……
うれしい。

じゃあ最後にお料理をおいしくするスパイスを一つまみ。
ほら、料理は“心” って言うじゃない。だからこれで完成なの
よね。

「ねえ湊君は知ってる？ お料理のさ行って」

「まあ、有名だよな」

間髪いれず答えてくれる湊君。いいね、博識ある人って。

「味付けに使う調味料の基本なんだけどね、さは砂糖。しは塩。せ
は醤油。そは味噌」

よく間違えるミスとして、しを醤油だと思う人がいるけど、違うの。
しはお塩。せが醤油なの。

「“す”が抜けてるじゃないか」

さすがの湊君の一言。
うん。やっぱりいいなあ。痒いところに手が届くっていうか、湊君の的確な返答。

私、とてもいいと思います。

おもわずにつこり微笑んじゃいます。
だから、ご褒美です。

湊君に心のスパイスを差し上げます。

「す”はね……」
「す”は……？」

「スリルよ」

「さあ、食べて湊君。おいしいよ」

「さあ」

「さあ」

「さあ」

「さあ」

「さあ」

「さあ」

「さあ」

「さあ」

「さあ

「さあ

「さあ

「さあ……あーん♪」

拾章ゝあら不思議ねゝ黒風花（後書き）

この番外編は別の視点でも書かれています。

○死神の破片version - 作：ぬじまき氏

<http://ncode.syosetu.com/n3110j/10/>

終章　拗ねちゃいますよ？　山岸　風花

ふふ、ちよつと疲れちゃったな。

決勝まで三試合やって、その後に荒垣先輩とお料理作って、でもやつと完成。あとはお料理をテーブルに並べるだけ。

え？　その前に自分一人で何か作らなかったかって？

湊くんの罰ゲーム用の料理？

ふふつ、それは湊くんの夢の話でしょう？

作ってないよ、王水入りの煮物なんて。

でも、もしそんなものを食べさせてたとしたら、正真正銘の罰だね。

もちろんゲームに対してのじゃなくて、湊くんの日頃の行いに対しての。

「うわぁっ！」

「わっ！」

バサッ！ と大きな音を立てて、突然湊君が勢い良く起き上がった。現在の状況を確認するかのように左右を見回している。

―― 寝ぼけてるのかな……

「目が覚めたんですか？」

「ふ、風花っ！？」

横からそつと声を掛けてみたら、すっごい驚かれた。かなり大袈裟に仰け反る湊君。

こちらを見る表情はちよつと引きつってる。

―― ちよつと傷つくよ、それ……

「もう……大丈夫？」

湊君の隣に座っていたゆかりちゃんが湊君に声をかける。なんだかすごい安心した表情で湊君はゆかりちゃんを見ていた。

「……うん、多分」

「はぁ……よかった」

心配させないでよと、心底安堵の表情を浮かべながらゆかりちゃん
は呟く。

そして大きなため息。
本当に心配していたんだろうな。

「あの、僕いつの間に……」
「あ、えっと、その……決勝戦で風花に負けた後、気を失って倒れたんだよ」

湊君は “ 負けた…… そっか。負けたんだ ” と、まるで確認するかのように呟く。

「どうやら、最後の攻撃のダメージで悪夢を見てたみたい」
「そ、そう？…… って、何また寝ようとしてるのよっ！」

湊君はもう一度ゆかりちゃんに寄りかかるうとしたんだけど、ゆかりちゃんは湊君の顔を両手で押していた。

—— 仲いいなあ……

巖戸台分寮の大きな食卓テーブルにお皿を並べながら、ちらっと様子を見て私は思わず呟く。

なんだろ、同じクラスっていうのが大きいのかな。
出会いがちょっと早かった分有利だったとか？
それとも、タルタロスと一緒に前線で戦っているのが大きいのかな。

…… 単純に性格？ ひょっと見た目とか？

「……おう、起きたか。飯出来てんぞ、ちゃんとした飯も食っとけ」
一人で考え込んでいた所に荒垣先輩の声が耳に届く。
荒垣先輩も湊君が起きた事に気付いたみたい。
軽く柔軟をしている湊君に、先輩は両手に皿を持ちながら声を掛ける。

「はい」

——でも、私も作ったんだもん。

「ちゃんと味わってくださいよ、今度のは、自信作なんですから」
これ、私も作ったんだよと、湊君にアピールしてみる。
湊くんは食卓テーブルに座りながら……恐る恐る料理を見てた。

なんかホッとしてるっ!?!
しかも涙ぐんでるっ!?!

「そんなおっかなびっくりに見て、意地悪です……」

——拗ねちゃいますよ?

「いただきます……あ、美味しい」

「ホント？　ありがとう」

でもたった一言で私も笑顔になれる。
単純です。

「よかった。さっきの夢とは大違い」
「どんな夢見てたの？」

手に持っていた料理を湊君の前に置いて、湊君の隣のイスに座る。
皿に盛り付けられている料理からは湯気が立ち上っていた。
出来たてだもん。

「臭いだけでコロマルが倒れるような料理を、風花が無理矢理僕に
食べさせようとする夢」
「……」

少し考える。これは良い機会だ。

「……そう。きっとその夢は、最近の湊くんに対する罰だよ」
「え？」
「最近、色んな女の子と一緒に居すぎじゃないですか？」
「いや、そんな事は……」

やっぱり自覚ないんだ。

本人はそんなつもりないと思うけど、毎日違う女の子と一緒に下校
してたら、ね。

勘違いさせて。期待させて。そんなのその気になるに決まってる。

私だって部活終わった後、よく一緒に帰らないかって誘われるし。

しかも雨降ってたりしたら、あ、相合傘とか……。

そ、それが嫌ってわけじゃないんだよ？
でもね、誰にでもっていうのはね。

桐条先輩も湊くんのこと意識してる感じだったじゃない。

普段苗字で呼んでいるのに、つい名前がでてくるなんて普通ありえないよ。

きつと二人きりのときに、名前で呼んでるんだと思うんだけど。
まったく、湊くんときたら！

—— 考えてたら、また少しハラ立ってきちゃった。

いろんな人に分け隔てなく接するのも、限度があるでしょ！

しかもだよ。

湊くん、その気持ちを利用してさ、勝つためにゆかりちゃんに告白するだなんて。

そういうことは、冗談じゃなくて真面目に言うべきことですよ。

「……少しは自覚持つてくださいね。じゃないと……怒りますよ」
「……はい」

「じゃあ食べてください。おかわりもありますよ。沢山作ったんですから」

「うん」

私の作った料理を美味しいねと食べてくれる湊君。
やっぱりこの笑顔を見てたら許してしまう。

ほんと。どうしようもない。

なんか今まで色んな事を考えたり、怒っていたりしていた事さえ、
どうだってよくなってくる。

「どうでもいい……か」

彼をゆらりと眺めながら、彼の口癖を真似てみる。

そうよね。これが私が決めた道。

私の力が必要だと言ってくれる、みんなと歩もうと決めた道。

楽しそうに食事をしているみんなの姿を見て、私の居場所はここに
はあるんだと再認識する。

楽しかったですね、カードゲーム。

機会があったら、またみんなでやりましょう。

でも、その時は女の子の気持ちを弄んじゃダメですよ。
じゃないと、今度はホントにおしおきです。

湊君。

Fin

終章く拗ねちゃいますよ〜山岸 風花（後書き）

この番外編は別の視点でも書かれています。

○死神の破片version - 作：ぬじまき氏

<http://ncode.syosetu.com/n3110j/11/>

これにて番外編本編は終了です。

最後までお読みくださり、ありがとうございました。
いかがでしたでしょうか？ もしよろしければ感想をお待ちしております。

さて、次は番外編を作り終わっての、ぬじまきさんとの対談、あとがたりを掲載いたします。

最後にもう一度、読んでくださった皆様、本当にありがとうございました。

後語り思い出し恥ずかしがりな感じでぬじまきさんと、そうじ たかひろ（前

今回の番外編作者、ぬじまきさんと、私 そうじ たかひろとの作者対談、あとがきです。

Episode Myself 本編、番外編本編ではありません。

後語り出し恥ずかしがりな感じで、ぬじまきさんと、そうじ たかひろ

そうじ「『巖戸台分寮最強決定戦』をご覧いただき、誠にありがとうございます」

ぬじまき「ありがとうございます」

そうじ「筆者のそうじたかひろと」

ぬじまき「ぬじまきです。今回はP3P発売&クリスマス&お正月企画ということで、この二人で作品を仕上げました」

そうじ「『Episode Myself』と『死神の破片』本編の読者の方は、また違ったテイストで楽しんでいただけたのなら幸いです」

ぬじまき「新規読者の方は、本編作品も是非是非よろしく願います」

そうじ「さて、それではあとがたりを始めたいと思います」

ぬじまき「『死神の破片』verと『Episode Myself』verでは異なったあとがたりを用意しているのですが、こちらでは今回のコラボ作品各話振り返りという名のあとがたりです。どうぞご覧ください」

ぬじまき&そうじ「では、スタート!」

各話振り返り

・プロローグ

ぬじまき「各話の振り返りです。まずはプロローグから」

そうじ 「『Episode Myself』での序章、わたくしのターン、ドロー、エリザベスですね。これは最初、ぬじまきさんから頂いた文章を私が若干構成組みを変更、ぬじまきさんバージョンを完成後にEpisode Myselfバージョン視点を書いています」

ぬじまき 「ベス嬢、大活躍の巻」

そうじ 「最初は真宵堂（骨董品屋さん）からカードを貰うって考えていたのですがぬじまきさんのアイデアでベス様になりました」

ぬじまき 「なんかあの壮大感がね。こんなことできるのは彼女しかないだろう、と」

そうじ 「異世界生成とかムリです」

ぬじまき 「さすがの海馬コーポレーションも、異世界は作ってないと思うんですよ。ですが漫画を読んだベス嬢が、異世界形成をしていると勘違いした、というのがmy裏設定」

そうじ 「あとは 瞬 殺 でございます。でしょうか？」

ぬじまき 「ちよいちよい挟んでましたね（笑）」

そうじ 「私の中のデキのよさトップ3のうちの一つですね」

ぬじまき 「瞬殺のくだりは面白かったです。あとドラマCDネタのアイギステレッテも」

そうじ 「ありがとうございます」

・美鶴VS湊戦

ぬじまき 「三戦の中で、湊が最も策士っぷりを発揮した回、ですかね」

そうじ 「私も『へえー』って感じで読んでました。……実は美鶴視点が一番苦勞しました。この人の思考はブリリアント過ぎて思いつかない（笑）」

ぬじまき 「そうだったんですか。僕が駄目出しする前はもつと美鶴先輩が可愛かったので、ノリノリかと思ってましたが」

そうじ 「なぜか、最初から『湊……はっ！』だけはあったんですよ」

ぬじまき 「何故でしょう？（笑）」

そうじ 「不思議ですよ。メッセージのやりとりの段階で、気が付けばこれだけは決定していました」

ぬじまき 「まあネタ出しを求めたのは僕なんですけど……。そうじさんのには、美鶴先輩はどんな人として映ってますか？」

そうじ 「P3で一番パラダイムシフトした人物……ですね。まあこの人こそ真のツンデレです。生徒会長、桐条グループな桐条美鶴と、湊と二人きりの桐条美鶴。違いがかわいいです」

ぬじまき 「ギャップ萌えの代表格、ですかね」

そうじ 「『これについてなんだが』。美鶴の部屋では『これについてなんだけど』。セリフですらこれもんです」

ぬじまき 「僕は結構カッコいいキャラクターとして描いてますね。美鶴コミュが3くらいで止まってた弊害でしょうか（笑）」

そうじ 「MAXは違います（笑）」

ぬじまき 「なんででしょうね。まあ死神の破片では登場回数もあまり多くないので、仕方ないでしょう（笑）」

そうじ 「あれ、美鶴について妙に語ってますね。おかしいな。次行きましょ」

・ゆかりVS湊戦

そうじ 「ではぬじまきさんお待ちかね？ ゆかり戦です」。

ぬじまき 「いや、別にお待ちかねというわけでも……（笑）」

そうじ 「見所はなんですか？」

ぬじまき 「性格の悪い湊、ですかね（笑）。いつもより酷いこと平気でやるので、どsかつゆかりファンな人に向いてると思います」

そうじ 「ボツになったアリス編は凄かったですもんね」

ぬじまき 「あれは、僕なりの全力でしたよ（笑）。次話に没ネタとして掲載していますが」

そうじ 「これ、みなさん乞う期待ですよ。ぬじまきさんにみせてもらった瞬間、『いや、リメイクじゃないですか』ってなりました」

ぬじまき 「詳しくは次話の没ネターverをどうぞ！」

そうじ 「あと、これ、ぬじまきさんとのやりとりなんですが……。そのままコピペします。カットされるかもしれませんが（笑）」

> 『彼に会いたい、会いたい会いたいの！理屈なんてないの！！……だっけ？』

> 「……！？ うつつうるさーい！！」

この後に、少しゆかりの心理描写が欲しいです。思い出し恥ずかりな感じで（笑）。

そうじ 「と、指定が入り、もちろん追記しました。流石、溢れるゆかり熱」

ぬじまき 「ここは、譲れない部分でした（笑）。何気に、ゆかり戦が一番文章量多いんですね。気合の表れ？」

そうじ 「ですね。間違いなく。ゆかり戦だけどちらの視点もぬじまきさんに書いてもらおうと真剣に思っていました。結局ゆかり視点は私が書いていますが、一番リメイクが多かったような気がします（笑）」

ぬじまき 「まあ、どちらかという心理戦メイン（not 頭脳戦）

で書いてましたからね。会話も多くなりますし。はっちゃけたせいか、逆にそうじさんに湊視点のリテイクを出された回数もダントツですけど（笑）」

そうじ 「そうでしたね（笑）」

ぬじまき 「紆余曲折の経過は、没ネタを見て読み取ってください（笑）」

・荒垣の部屋

ぬじまき 「はい、じゃあ荒垣の部屋」

そうじ 「構想は結構前からあったんですが、結局一番最後に作ったパート。ぬじまきさん作です」

ぬじまき 「キーワードは『子供な天田とそれに狼狽する荒垣』」

そうじ 「これがあるおかげで全体がバトル一辺倒にならない、大事なパート。荒垣先輩の苦勞が伺えます」

ぬじまき 「今回の、というか荒垣先輩はいつもこういう損な役回りですよ。苦勞人」

そうじ 「良い人です」

ぬじまき 「まあちよっとした余興的なパートでした」

・風花VS湊戦&エピローグ

そうじ 「ラストですね。これは『死神の破片』有坂湊を想像して書いたものです」

ぬじまき 「あ、そうなんだ（笑）」

そうじ 「はい。イメージ違いますか（笑）」

ぬじまき 「まあ黒風花という前提は、あいにく死神の破片でなりたっていないので……（笑）」

そうじ 「いやいや、Episode Myselfでも黒風花はないですよ……多分（笑）」

ぬじまき 「イメージが違う合わない以前の問題ですね（笑）」

そうじ 「そうですね」

ぬじまき 「デュエルを練り込むのは、ここが一番大変だったかな。風花に一矢報いることがなかなかできなくて」

そうじ 「ちなみに私は風花視点が書けませんでした」

ぬじまき 「一体どうしたんだ！？ という感じでしたが（笑）」

そうじ 「いや、書いたんですが、ただ残酷な心情描写が延々と続く話になっちゃいました」

ぬじまき 「……（笑）」

そうじ 「ムリですよ（笑）。そこで急遽アイギスに助けてもらって。ゆかりもちよこつと応援で凌いだってのが本当のトコです」

ぬじまき 「けど、アイギスの傷心は普通に笑いましたよ」

そうじ 「怪我の功名です。おかげさまでこれも私の中のデキのよさトップ3の一つですね」

ぬじまき 「今回の作品、ある意味酷い扱いを受けてる風花ですけど、いつもより余計に怒っているだけで、優しい事にはかわりないんですよ。それだけ追記しておきます」

そうじ 「それがエピソードですね」

ぬじまき 「そうです」

そうじ 「これは私が書いたのをぬじまきさんが追記、アレンジ。さらにぬじまきさんが追加した別文章を私が再構成、二つを合体。と、ある意味、一番の合作です」

ぬじまき 「ですね、ぐつちゃぐちゃです（笑）」

そうじ 「実は少し、謎かけが含まれているんですよ。ぬじまきさんのアイデアで。二通りの読み方があるというか」

ぬじまき 「何気にちよいちよいヒントというか、推測を誘うパー

ッをちりばめていたり」

そうじ 「そしてその絡みで、あまりに風花を不憫に思ったぬじまきさんが、風花のやさしさテイストをふんだんに含んだ独白を別で作成。結局エピソードに練りこんでいます」

ぬじまき 「いや、不憫に思ったというか、もともと描いていた設定を吐き出しただけです（笑）」

そうじ 「そうだったんですか」

ぬじまき 「別に後付けじゃありません（笑）」

そうじ 「よかったですね、風花さん（笑）。そういえば王水もなにか元ネタがあるんですか？」

ぬじまき 「ああ、それはラノベネタです。『バカとテストと召喚獣』っていう。腹筋崩壊必死ですので、みなさんも是非読んでみてください」

コラボを通しての総括

ぬじまき 「とりあえず、納得いくものはできましたね。ここまで長編になるとは思っていませんでしたが」

そうじ 「本編なら2か月分に相当します（笑）」

ぬじまき 「これをやっていなければ、本編もここまで遅れなかったかもしれない（笑）」

そうじ 「ですね（笑）。ま、楽しめましたし、皆様にも楽しんでいただける物に仕上がったと思います」

ぬじまき 「あとは、どの程度の人に見てもらえるかが楽しみです
ね」

そうじ 「はい。今回のスペシャルは普段読んでくださっている方や、お気に入り登録、感想や評価をいただいた方へのお礼でもあります」

ぬじまき 「11月入ってP3P発売してから、やたらアクセスが上がりませんでした？　うち、お気に入り登録も二倍以上に跳ね上がりましたよ」

そうじ 「はい。おかげさまでまもなく総合評価も100を超えそうです」

ぬじまき 「読者の皆様には、本当に感謝です」

そうじ 「あとがたりまで読んでくださって本当にありがとうございます」

ぬじまき 「今後は本編の更新を頑張りますので、応援よろしくお願いします」

そうじ 「ぬじまきさんも、本当に数ヶ月間ありがとうございました」

ぬじまき 「お疲れ様でした。10月からの活動も楽しかったです」
そうじ 「こちらこそです」

ぬじまき 「この作品をご覧になって頂いた皆さん、今後は本編の方でお会いしましょう」

ぬじまき&そうじ 「それではまた！」

後語り 思い出し恥ずかしがりな感じでぬじまきさんと、そうじ たかひろ（後

この番外編、あとがたりはもう1パターンあります。

○死神の破片version - 作：ぬじまき氏

<http://ncode.syosetu.com/n3110j/12/>

さて、これにて番外編は終了です。次回よりEpisode Myself本編の続きとなります。

皆様、これからもEpisode Myself本編、及びぬじまきさんの『死神の破片』をどうぞよろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2945/>

Episode Myself side story ～ 巖戸台分寮最強決定戦 ～

2010年10月9日00時40分発行